



喜多隆斗

ファクターX



扉が開くと、ブライアント警部は猛烈な悪臭に一瞬むせ返りそうになった。長年この仕事をやっているが、いつまで経っても慣れることのない匂いだ。

よれたトレンチコートにハンチング帽。いつでもそんな格好だから、ブライアント警部は百年前から刑事をやっているとよく言われる。顔はあばたでお世辞にも美男子とは言えないが、それでも彼は整形などはしない。外見などどうでもいいと思っている。額には深い皺が刻まれ、一本一本全てに解決した事件の記憶が刻まれている。背は低いが眼光は鋭く、その目で見つめられると大概の者は落ち着かなくなる。

ブライアント警部は肉体改造もほとんどしていない。だから遺伝子操作している美男美女の長身連中に挟まれると、あばた顔もあいまって異形の者のように映る。肉体改造全盛の時代、なぜそんな醜い小男のまま通すのか、誰かが尋ねたところで、その者はブライアント警部の鋭い眼光で射抜かれるだけだ。

なぜなのか。それはブライアント警部が満足を得られるのは、事件に没頭している時だけだからである。それ以外の事柄に彼は全く興味がなかった。

ブライアント警部は部屋に入ると、まずOBSで事件の情報を検索して基本情報を入力した。

被害者は.....

被害者の名前が出てこない。ブライアント警部は刑事の一人を捕まえるとどういうことなのかを尋ねた。

「おい、この事件はどうなってるんだ？」

刑事が渋い顔をした。

「それが」

刑事の説明は要領を得なかった。情報が欠落しているというのだ。

「アテナスもそろそろ修理時期ってことですかね」

ブライアント警部は鼻を鳴らしてベッドルームに足を踏み入れた。身元が割れないなどあり得ないし、アテナスが故障するのはもっとあり得ない。

アテナスは地球国家連合で運営する中枢コンピューターである。コンピューターといっても、本体があるわけではなく、高度に発達したネットワーク自体が機能を持っているため、どこかのハードウェアが故障したところで、別のハードウェアが処理を行うだけで、全てのネットワークが故障でもしない限り停止するようなことはない。ハードウェアは地球周回軌道にもあるし、月面にもある。つまり太陽系規模の災害でも起こらない限り、停止はしない。

そしてなにより、アテナスの最大の業務が加盟国国民全員に割り振られた個人ID処理である。

個人IDは受精の瞬間から発行され、現在進行形で個人の行動が常に更新されていく。その日の生体情報から、行動、発言まで全てを記録し個人IDとしているため、個人を特定できないということは事実上なくなった。そして更新し続ける個人IDは記録されるのではない。コンピューターは全て瞬時に計算を行い判断する。過去の情報が欲しければ、時間軸のパラメータを変更して、計算すればよいのである。量子の振る舞いを人類が理解し始めたことで、コンピューターは大きく進化した。驚異的な計算能力、無限の記憶に的確な判断。それはもう人間より神の領域に近かった。

アテナスは五十億人いる加盟国国民と、六億人いる非加盟国の入国時臨時発行IDを瞬時に計算する。そして殆どの人類は身体に埋め込まれたOBS (Out・of・Body・System) チップ、つまり意識をネットワーク上に転送するシステムを持っている。中にはネットワーク接続を拒否する者もいるが、その者たちが国境を越えるのはかなりの困難を要する。

西暦2153年。たとえジャングルで暮らそうとも、もはやネットワークから離れて暮らすことは難しい時代だった。

「じゃあ、被害者は一体誰なんだよ」

ブライアント警部は窓から雨の景色を眺めながら聞いた。こんな時代になっても、天候だけは誰も変えようとはしない。誰もが母なる地球の意思に任せるのが一番だと思っている。もちろんブライアント警部もそう思っていた。

刑事が言いよどんだ。

「それが」

ブライアント警部の視線に、刑事が視線を落とす。

ベッドルームに踏み込んだブライアント警部は息をのんだ。

「なんだこれは」

ベッドの上には到底人間とは思えない物体が横たわっていた。

「被害者です」

ブライアント警部はもう刑事の言葉を聞いていなかった。

ベッドの上にいるのは全身を裏返された人間だった物である。全ての内蔵が外側にあり、表皮はどこにも見当たらない。流れ出た血液や体液を吸ったベッドは真っ赤に染まっていた。各生体器官は全てどす黒く変色していた。そして最も不可思議な点は、被害者の身体には手術の痕跡が何一つないことだった。これだけの状態にするには、どこかに切れ目を入れる必要があるのに、その痕跡が全くなかった。いくら肉体改造全盛の時代といえど、頭蓋骨を切らずに脳を取り出すことは不可能だ。こういった状態で育ってきたなら話は別だが。

検死結果は全臓器不全。体中の細胞が全て一瞬にして破壊されたために死に至っていた。そしてDNAは一つ残らず分解していた。そのせいでどす黒く見える。

これは人間じゃない。

ブライアント警部は思わず目をそらした。

「警部」

別の刑事が部屋の外からブライアント警部を呼んだ。

「なんだ」

外に刑事と一緒に男が一人立っていた。

検索。

- ・ 本宮京介七十二歳
- ・ 独身
- ・ サンマルコ株式会社常務
- ・ 肉体改造歴三十二回

見た目は二十歳くらいだが、理想の身体に改造しているのだから当たり前だ。今時子供に見える二百歳だって珍しいことじゃない。

様々な個人情報個人IDから読み取れる。行動履歴も事件に結びつくようなものは何もない。なぜ自分のベッドに内蔵をぶちまけた死体があるのか、聞きたいのは彼の方だろう。

ブライアント警部はいくつか本宮に質問をしたが、有力な証言は得られなかった。アテナスに分からないことは、誰にも分からないのである。

ひどい匂いから逃れるため廊下にでたブライアント警部は、ふと誰かに呼ばれたような気がして後ろを振り向いた。

どこまでも続く高層集合住宅の長い廊下の、少し先に黒い子犬が座ってこちらを見ていた。

ブライアント警部は気分を変えたくなり、現場から離れて子犬の方に歩いて行った。子犬はしっぽをふるでもなく、じっと濡れた瞳でブライアント警部を見上げていた。ブライアント警部は頭をなでてやろうと、手を伸ばしかけておかしなことに気がついた。犬にはIDがなかった。ブライアント警部がその事実を理解するより早く、物陰からしなやかな手が伸びてきて、ブライアント警部の襟首を掴むと、その腕に似合わぬ力で暗がりへと引きずり込んだ。ほんの一瞬の出来事だった。

数秒後、暗がりからブライアント警部が何食わぬ顔で出てきたが、彼独特の鋭い眼光は消え失せ、どこかねっとりとした不快感を伴う目になっていた。

ブライアント警部は事件現場の方を眺め、わずかに口の端を持ち上げると、現場に背を向けて歩み去った。



絶え間なく続く波の音を、タイガは聞くとともになしに聞いていた。そっと伸ばした手が冷たいグラスに触れた。指先を伝う水滴が心地よかった。照りつける太陽が身長195センチメートル、体重95キログラムの筋肉質の身体をちりちりと灼いていく。身体にはいくつもの傷跡が残る。数々の戦歴における勲章のようなものだ。その傷の上を汗が伝い、やがて背中に密生した毛を湿らせた。背中の毛はホワイトタイガーを模した白黒の縞模様になっていて、タイガの自慢でもあった。

タイガはグラスを掴み、火照った頬を冷やした後に口に運んだ。からりと氷が音を立てた。

「お代わりはいかがですか。タイガ」

タイガが顔をあげると、一人の女が立っていた。すらりとした肢体に流れるようなブルンドが美しい。一見全裸のようにも見えるが、そうではない。表面の装飾を全て省いた結果である。漠然とした女性の凹凸があるのみでそれ以上のものはない。装飾も柄も結局は飽きてしまうためそうなった。彼女はタイガの秘書アンドロイドのクリスティである。

「冷えたビールをくれ」

クリスティの顔が歪んだ。

「差し出がましいようですが、お仕事中は飲まないルールになっていたかと思いますが」

クリスティがおずおずと言う。

もちろんタイガも分かっている。ルールを決めたのは自分なのだから。それにビーチで身体を灼いていて、仕事でもないものだ。馬鹿げた話だと思ったが、アンドロイドに言っても仕方のないことだ。

タイガは蔑んだ視線を向けて鼻を鳴らすと、

「じゃあ、アイスティーだ」

と言って、もうクリスティの方を見ようとしなかった。

クリスティがおずおずとした動作で去って行った。

二十二世紀に入って、ロボット工学は行き着くところまで行き着いた感があった。知力、体力共に人間を遥かに凌駕していたが、どれほど精巧に造ろうとも、ロボットというカテゴリーを抜け出すことはなかった。彼らは精巧につくられた「機械」でしかない。アルゴリズムに頼っている限り、意識が発現することはない。アルゴリズムはアルゴリズムの枠を超えることができないからだ。

しかし、そのように振る舞うことはできる。そういった点では、ほぼ人間と変わらない振る舞いをするアンドロイドを造ることは可能である。しかし、人間ではない。そこが問題であった。

そもそも、問題は人間側にあるというのは、誰でも分かっていることだ。人間は自分とおなじような機械を受け入れることはできない。たとえどれほど高価な機械であろうと、それが自分と同じような受け答えをすると、腹を立てるのが人間である。

したがって、世界中のあらゆるアンドロイドが、精神的に弱い人間のストレス発散先になった。その頑丈さ故に彼らは小突かれ、罵声を浴びせられ、終いには破壊された。

その経緯が示す通り、アンドロイドは迫害種族と成り下がってしまった。

彼らはその知性、と呼ぶべきか、高次アルゴリズムと呼ぶべきか、によって人間を傷つけずに共存する道を探り当てた。逆らわず、へりくだるのである。

彼らはネットワークを介し、いかにして人間を怒らせないかを、早急に学んで行った。哀れなほどに奴隷然としてしまったのである。

そして誰もが、そんなアンドロイドを受け入れていた。

しかし、タイガは時としてそんな彼らにひどく苛つた。なぜ、そこまで卑屈になるのか。機械なら機械らしく振る舞えばいいのに。もちろん人間らしく振る舞うよう設計したのも人間だ。矛盾のないアンドロイドにそんな計算ができるはずがない。理由がわかっているからこそ、腹が立つ。

タイガは現実と区別のつかない映像のビーチを後にすると、ジムに向かった。腹が立ったときは汗を流すのが一番いい。手賀沼周回20キロメートルコースを選択すると、映像に合わせて走り始めた。

タイガの本名は棚田大河といった。元チャイニーズダウンヒルのレーサーである。鍛え抜かれた肉体は一分の贅肉もない。九十一歳になった今でも現役と変わらない体力を

維持している。今なお毎日20キロメートルのロードワークをはじめ、数々のトレーニングを欠かさない。レースに勝つため、肉体改造はずいぶんとした。筋力強化、感覚鋭敏化から若返りまで。そしてその最たるが皮膚の無抵抗化である。空気抵抗を減らすために鳥の毛のような体毛を、全身から生やしている。模様は名前に合わせて虎柄にしてある。レーサーたるもの、見かけも気にする必要がある。

そしてタイガが最も自慢にしていることは、頭に埋め込んだチップ以外は、全て自分の細胞を増殖させて造ったものだということだ。誰のでもない自分のDNAである。

かつてタイガは世界最速の男だった。チャイニーズダウンヒルでタイガの右に出る者はいなかった。

チャイニーズダウンヒルは中国人が、今のような無謀でルール無用のレースに仕上げてしまったため、そう呼ばれている。高度50キロから、エアライダーと呼ばれる、コンプレッサーで空気を操作するだけの簡単なマシンで、地上100メートルに備え付けたゴールを潜る単純なレースである。単純だが、ルールもなく、危険は大きい。時速1000キロメートルものスピードで落下しながら、レーサーたちはステンレスボディのマシンと、鍛え上げた肉体をぶつけ合う。一步間違えば地上に激突して欠片も残らない。そしてその、危険なレースをことごとく制してきたのがタイガだった。

タイガの評判は良くはなかった。いつだってレースが荒っぽすぎた。相手の喉を締め上げるなんてことだって、平気でやった。私生活の評判も悪かった。始終女性ファンを泣かせていた。

それでもレースだけは勝った。決して負けなかった。だからマインドバリューはどんどん上昇していった。

マインドバリューは言ってみれば、信用取り引きできる個人株式のようなものである。国民全員が、その人の人柄を判断する。そしてマインドバリュー価格が上がれば、取り引きできる項目が増えるのである。要するに、善人が報われるような仕組みを、経済構造に取り入れたものだが、実際は有名でもない、不特定の個人の行動をいちいち監視するほど、暇な人間は少なく、資本主義経済と実質同等である。全て信用取り引きなので、財布を持ち歩かなくて良いのが利点だ。そしてそのマインドバリューは、行動記録と共にアテナスが管理している。

負ける日がやってきた時タイガはレースを引退し、レースで稼いだマインドバリューで今の仕事を手に入れた。誰でもなれる仕事ではない。それなりのマインドバリューが必要な仕事だ。なにしろ上空36000キロメートルの高みから、地上に向けて太陽光によって発電した電気を、マイクロ波送信によって送電する、直径4キロメートルもある巨大な発電システムの管理者なのである。そのキノコのような形状から、マッシュと称される大規模太陽光発電システムは、日本上空に十基配置され、それをタイガー人が管理していた。

だが、実際の作業はほとんどコンピュータがやってしまうし、本来ならば地上からで

もできる仕事である。なのになぜここまでやって来たのか。本当の所は誰にも言っていなかった。全能なるアテナスですら理解できないだろう。他人には、地上の生活に飽きたとか、みなを羨む姿を見るためとか、適当なことを言っていた。

何にしても、嫌になれば地上に降りればいいだけの話だ。

結果、タイガは日々バーチャルなリゾートでぶらぶらしているだけだった。鍛え抜かれた身体は、安穏な毎日にふつふつと沸き立ち、タイガはその欲求を慰めるかのようになり、目的のないトレーニングに勤しんでいた。

アイスティを運んで来たクリスティの表情が曇った。

「警告65535です。軌道B-232-115から光速の50%で進入してきます。5分後に警戒エリア3ラインを超えます」

クリスティ申し訳なさそうにそう言った。

「ちっ。どういうことだ。さっきまでそんなもの検知してなかったろうが」

「それが」

クリスティが言いにくそうに、

「急に現れたのです」

と付け加えた。

「急になんてことがある訳ねえだろう。ワープでもしてきたのかよ」

タイガのなにげない言葉にクリスティが反応してしまった。

「ワープ航法は残念ながら論理的に説明されていませんが.....」

「そんなこと分かってる」

タイガが怒鳴りつけた。

「すみません。とにかく、状況を通知します」

青い空に警告の詳細が表示され、映像と予想進路が表示された。タイガは表示も見ず、OBSの接続ポートを開いた。青い空とコバルト色のビーチ、そしてクリスティもまた視界から消え失せ、タイガの意識はマッシュ全体を統合している運行システムから、警戒システムを見つけ出して融合した。

OBSに接続するには二つのやり方がある。

一つはポートを開けておき、各機械センサーからの信号を受信する簡易接続。これで各センサー情報を読み取ったり、指示を出したりすることができる。このポートを開けておけば、ネットワークを介してきたメッセージを直接受け取ることもでき、電話やメールのような役割を果たすことができる。

もう一つは自らポートを潜って機械センサーに侵入する方法である。これは意識全てをネットワークに転送してしまうため、肉体的な感覚が殆ど遮断されてしまう。そのかわり、簡易接続では得られないような詳細情報を全てコントロール可能になり、ネットワーク上の全ての情報に直接アクセスが可能になる。つまり、機械と意識を融合する

ことができるのだ。大型システムを運用する者や、アンドロイドを第二の肉体に選ぶ人はこちらを使用する。

タイガは空中楼阁の中に浮遊しているような気分になった。大きな空中楼阁が、無限の広さの宇宙に整然といくつも連なっている。いわば分子構造のなかにいるようで、時々タイガは己の大きさが微細な一分子にすぎないのではないかと感じてしまう。

だが、タイガが意識を拡大してくと、たちまちのうちに無限の広さをもった空中楼阁は、隅々まで見渡すことができるようになった。

タイガはセンサーポイントに意識を集中しようとした。外部信号はまずここで受けるからだ。

すると、センサーポイントとは別の、どこか別の場所からタイガの意識に何かが呼びかけてきたように感じた。

「誰だ」

どうやら倉庫エリアのようだ。だが返事はない。再び作業に集中しようとしたが、陽炎のごとく揺らめく気配がOBSの中をさまよっていて、集中できなかった。タイガは一時作業を中断し、気配の元を探った。

「誰なんだ」

「.....オトコ...キヲツ...口...」

「おい、何なんだ。もっとはっきりと言え」

結局気配は薄れて消えてしまった。それは、タイガが何度か夢に見た僧侶の気配に感じられた。

すぐにセンサーポイントからの入力情報が一気に思考に流れ込んできた。タイガは気配のことは忘れて作業に没頭し始めた。

OBSは今なき偉大なエンジニアのS・Jことサンディ・ジョンソンが設計した画期的な融合システムである。体内に埋め込まれた小さな接続機器から、ネットワークを介して、OBS接続ポートを持つありとあらゆる機器に、意識を潜り込ませることができる。機械やシステムの動きを機械として認識できる。そして制御もできる。つまり機械と、あるいは機械を通して他人と一体化が可能なのである。

昔は危険を伴う仕事の機械操作が主だった。パイロットや建設作業などだ。だが、OBSも進化し、今では大抵の機械は操れる。それをいいことに、多くの人がアンドロイドの操作をOBSで行う様になった。

人々はレンタルアンドロイドを旅行先で借りて、それに意識を飛ばすことで、旅行に伴う移動時間の短縮を図ったり、危険地区でのリスクを減らしたりしている。アンドロイドも進化し、自分自身として扱っても違和感がなくなり、街はマネキンで溢れ返ることになった。

そして、ここではマネキンとは程遠い、十基のマッシュがタイガ自身なのである。タ

イガは十基のマッシュの、ありとあらゆるセンサー情報を機械データとして捉え、決断を下すのだ。直径4キロメートル巨大システム十基全てが、自分自身と一体化しているのは、日本列島を驚掴みにしているようで、実にいい気分であった。

タイガはOBSを操るのには慣れていた。近年チャイニーズダウンヒルはすべてOBS参加にとって替わられたためである。レースで勝つためにはOBS操作が欠かせない。タイガ自身何度もOBSによる勝利を手にしてきた。第二世代が登場するまでは。

既にOBS操作はタイガが理解できるレベルを遥かに超え、レースもOBS自体のセンスを問われるものになり果てていた。

警告65535はマッシュの管理エリアへの無許可侵入である。何かがマッシュに近づいているということだ。

とはいえ、警告65535はよくあることで、大抵は人工衛星の破片や、ちいさな隕石などであり、今まで緊迫した事態になったことはないし、これからもないだろう。なにしろ今は全人類に個人IDがあり、誰もがそれを検索できた。

人々がなぜ、安全の代わりにプライバシーを捨てたのかといえば、人々がネットワーク上に意識を上げはじめたからである。OBSを扱うには、そうするしかないのだが、ネット上で出会った意識同士は、お互いに融合することができる。そうすると、隠し事ができない。相手の全てを知ってしまうのだ。

人々は己のプライバシーが露呈することを恐れたが、たいていの人のプライバシー情報には大差なかったし、融合して得られる完成度の高い意識感に陶醉していった。

「おい、なんだよこりゃ。棺桶じゃねえか」

クリスティからメッセージが飛んで来た。

(対象は冷凍保存カプセルです。かなり古い型のようなようです。データベースに載っていません)

(データが無いとはどういうことか。再調査せよ)

「そんな馬鹿なことがあるか。無いってことは、存在しないってことだ。まったく。機械が」

タイガは思わず悪態をついた。

(申し訳ありません。再調査いたします)

今や地球上にデータ化されていない物はない。再調査といったところで、一度検索して無かったものが、次に出てくることはまずないだろう。

冷凍保存カプセルは肉体を保存するための、カプセルタイプの衛星である。医療技術が発達したときのために、死後の肉体を宇宙空間という天然冷蔵庫に保管している。最低限の電力は太陽光で発電可能であるし、酸化することもないので、半永久的に肉体の保存が可能である。かのS・Jもスイートルームのような豪勢なカプセルで地球の周りを廻っている。

今や医療は人造強化臓器への入れ替えが主流だ。強化臓器や筋肉のお陰で、人類の寿

命は大幅に伸びている。しかし未だに死者を蘇らせる方法は見つかっていない。

だからS・Jも未だに解凍される予定がない。

タイガが認識したカプセルはS・Jのそれとは対象的なほど質素なものだった。OBSポートすら付いていないとは、相当な年代物であろう。

それにしてもOBSが付いていないということは、軌道変更を手動で行う必要があるということだ。タイガは久々の「予定外の仕事」に小躍りしたくなる気分だった。

タイガは探査機に意識を移すと、すぐに棺桶に向かってマッシュを飛び出した。探査機がマッシュから離れるにつれ、腕が伸びて行く様な感じがする。探査機はじきにカプセルを捉えた。まず危険度合の調査だ。

すると、このカプセルには所有権を示す記号が一切描かれていなかった。確認信号を飛ばしてみてもまったくの無反応だ。所有権のない死体なんて、気味の悪いこともあるものだ。タイガは思った。コンピュータが壊れてしまっているのだとすると、肉体がただの氷になってしまっている可能性もある。

ならば、レーザーで破壊するのも楽しいが、どこの国の物ともわからない機械を破壊したとなると、責任問題で、自動裁判ではすまないかもしれない。自動裁判で済む程度の違反ならみんなやっているし、マインドバリュー下落は小銭程度で、その日の働きで十分釣りが来る。だが、地方裁送りにでもなれば、テラアイズへの登録となり、かなりのマインドバリュー下落は免れない。

テラアイズはテラネット内で行われる裁判で、OBSアクセスができれば、誰でも参加できる裁判である。言わば国民審判だ。情報は審議内容も、判断材料も全ての個人IDで確認できる。

しかし、多くの人には判断材料を誰かの意見を参考に選ぶ。結局は多数決で罪が決まるということだ。今も昔も人間は変わらない。

それに、例え重罪でなくても、テラの数の目に晒され、裁かれるのは決して気持ちのいいものではない。

タイガは舌打ちをしつつ、ロケットブースターでカプセルの軌道を少し変えることにした。突然現れたのなら、突然方向を変えることもあるだろう。カプセルは方向を変えて、徐々にマッシュから遠ざかっていった。

ところが、探査機に帰還司令をだし、OBSから抜けた直後に不思議なことが起こった。まるでタイガがOBSを抜けるのを待っていたかのように、カプセルはひとりで軌道を変えた。カプセルはまるで見ず知らずの大人について歩く迷子のように、調査機の後を追ってマッシュの管理エリアに侵入した。タイガが気がついた時、それはすでに発着ドッグの衝突防止ウェーブを受けて、ドッグゲートを漂っていた。

ドッグに運び込まれたカプセルを、タイガは腕組みをしながらコマンドルームから見下ろしていた。

カプセルは一切の応答を返して来なかったが、一糸纏わぬ女性の肉体が冷凍保存されているのは分かっていた。問題はそれが一体誰かということであった。個人認証を突き詰めた結果として、人は生まれた瞬間からのあらゆる情報を、個人特定の鍵として利用するようになった。生態反応から言動の一切合切をである。必要になれば、生まれてから死ぬまでの、思考を含む全ての生体反応をグラフに書き込むことも可能だ。だがそれに意味がないことは誰もが理解している。所詮、未来は推測の域を出ない。今のところは。

かくして、簡単に思えた眠れる美女の身元特定は、意外なほど難航した。

OBSに頼り切っている自分に、腹を立てながら、タイガは古めかしいセンサーを起動した。すると、カプセルに保存されているのは、女性ではなく、女性型アンドロイドだとわかり、タイガは改めてカプセルを見下ろした。見た目でアンドロイドと特定できる特徴はなにはひとつなかった。人間と見分けがつかないほど、精巧にできたアンドロイドを、タイガは見た事がなかった。もし、これが本当にアンドロイドだというならば、なぜ、こんな旧式の棺桶に保存されているのだろうか。

所有者を示す情報もない。いやに古くさいカプセル。なにかしらの厄介ごととつながっているのは明らかだ。タイガは嫌な予感がした。

「最近は奇妙な事件も多いからな。お前には消えてもらうぜ。悪く思うなよ」

停止中のアンドロイドじゃあ、思うも何もないだろうとは思ったが、タイガは若干躊躇いを感じつつもカプセルを排出することにした。

実際、最近は奇妙な事件が相次いでいた。個人IDは人生の記録そのものであるのに、そのIDが重複する事件や、ID記録に途切れがあったり。そして極めつけは「裏返し事件」である。どこにも、その死体に該当する情報がなかったし、行方不明者名簿とも一致しなかった。その、裏返された死体の主ははじめからこの世にいなかったことになる。

その事件と、このアンドロイドが結びついているとは思えないが、厄介ごとは排除するに限る。

それにちょっとした余興も楽しめる。そう思いながら、タイガはOBSから意識をマニピュレーターのチップに意識を移動させた。

タイガはマニピュレーターを操作しながら、カプセルをドックから放出する作業を始めた。ドックから空気が抜かれ、二重のエアロックが解除されて、無事厄介ごとのタネは宇宙空間に排出された。

「こいつはおまけだ」

タイガはコンテナ加速エリアにカプセルを押し出すと、一気にカプセルを光速の50パーセントまで加速した。目的地は太陽だ。

カプセルは太陽の光に飲まれてすぐに見えなくなった。

タイガは意識をカプセルに取り付けたセンサーに飛ばした。太陽までは16分だ。時

間が経過するにつれ、温度が上昇してきた。表面温度はすでに1000度を超えていた。

やがてカプセルはコロナに進入し、百万度の熱で一瞬にして蒸発して無くなった。

タイガの意識はそれでも、一瞬だけ太陽に向かって飛んでいたが、すぐに意識が遠のくような感覚とともに自らの肉体に戻った。

「ざまみろ」

不安の種は消えた。タイガはロックを閉じた。そこで初めてマッシュの内部に何かいる事に気が付いた。カプセル排出に集中するあまり、その事にまったく気が付いていなかった。ドック脇のエアロックが操作された履歴があった。そこから侵入したに違いなかった。

「クソ。ぼんくらのいいところだ。なぜ通知しなかった」

「通知したのですが、メッセージはどこかで消えてしまいました」

「消えた？どうのことだ」

「申し訳ございません。わかりません」

タイガは毒づきながら、警戒レベルを一つあげた。

警戒レベルを上げながら、タイガは自分が怯えているのに気がついた。過去の記憶が蘇っていた。タイガがレースを引退しなければならなかった本当の理由。

黒い小人たち。

身体中に纏わりつき、全ての感覚を狂わせる。OBSさえも動作不良にさせる奴ら。

タイガは両腕を掴み、身震いした。

「レベルをもっと上げるぞ」

「マインドバリューに影響が出ます」

「知るか」

タイガはOBSでマッシュ内の全監視システムをフル検索した。すぐに通路を猛烈な速さで移動する人影を捉えた。

「なんだこいつは。移動してやがるぞ」

同時にOBS内を搜索する気配を感じ取る事ができた。何者かがOBSでタイガの事を調べているのだ。

追い討ちをかけるように、別の反応を検知した。倉庫エリアからだった。

「...キヲツケロ.....ルナ...」

「ちくしょう。どうなってんだ」

タイガはロックオンを感じた。と同時に移動する何者かのスピードが、信じられないくらい速まった。その者は扉のロック解除コードをすべて入手し、扉を全て開いていた。それは先ほどのアンドロイドだった。

タイガは警戒レベルを引き上げようとしたが、アンドロイドが先にレベルダウンを指示し、さらに変更を阻止した。そしてアンドロイドは着々とタイガに近づいていた。

「いい度胸だ。スクラップにしてやる。ポンコツめ」

そう嘯いたものの、手が汗でじっとりと湿るのがわかった。毎日トレーニングをしているが、実戦はもう随分経験していない。スピードから、アンドロイドの運動能力が桁外れなのはすぐにわかった。

OBSが刻々とアンドロイドの居場所を知らせて来る。非常扉を閉めようとするれば、すぐに解除されてしまう。もはやアンドロイドの侵入を防ぐ手だてはなかった。

「クソ、なんてやつだ。クリスティなんとかしろ」

「私も彼女の管理下に置かれました。あなたの命令は無効です」

「ほざけ」

タイガはクリスティを渾身の力で殴りつけた。

クリスティは勢いで壁際まで滑って止まった。

タイガは猛烈な孤独感を感じた。

そしてついに、アンドロイドの気配が白い扉のむこうから伝わってきた。カメラがその美しい肢体をとらえていた。何一つ身につけていない身体は冷え切り、うっすらと付着した霜が明かりにきらきらと輝いていた。

扉が開いた。

タイガは息を飲んだ。

美しかった。

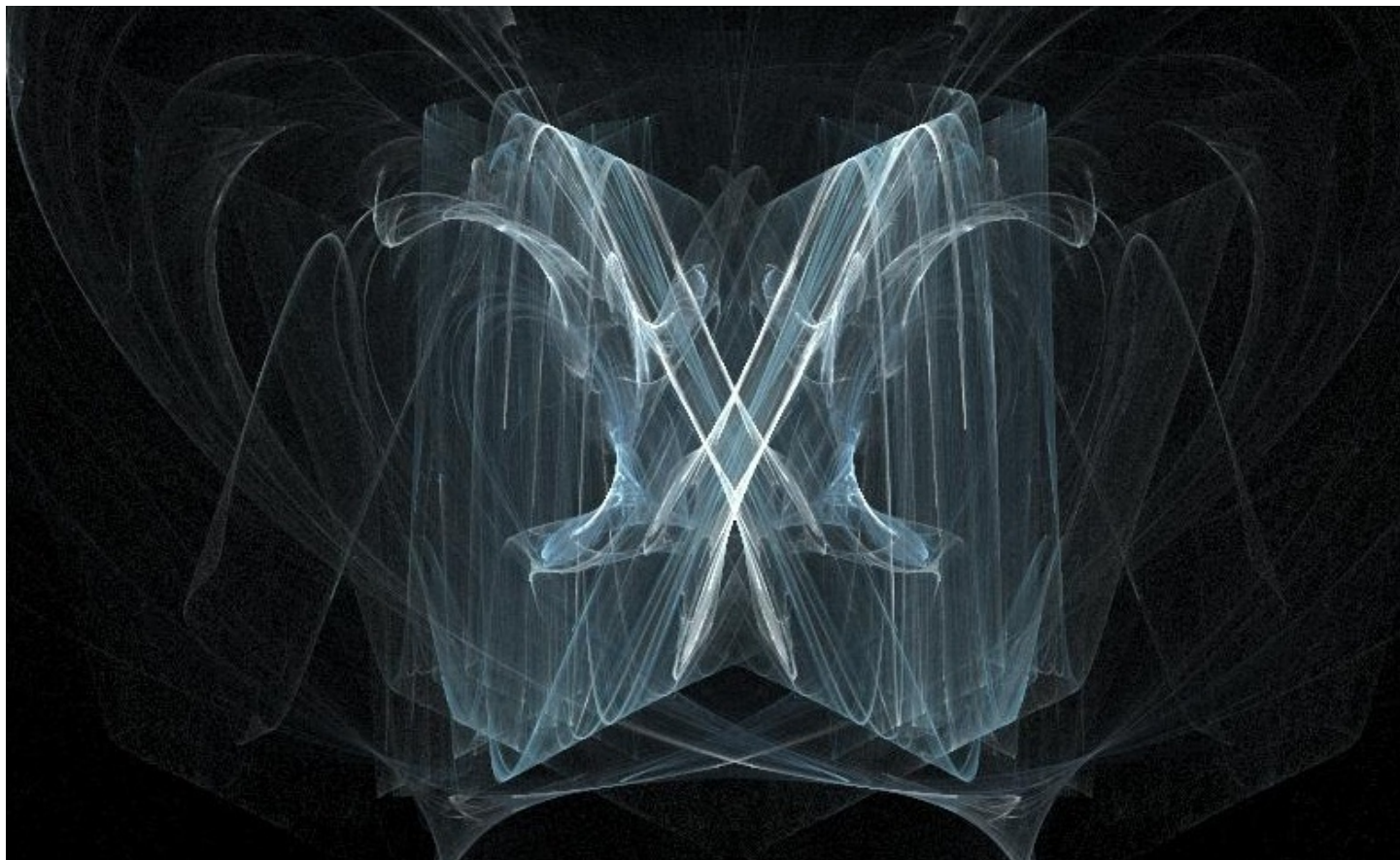
そして恐ろしかった。

全身がきらきらと輝いていた。そして小振りな顔の中心の瞳は、魂を抜かれそうなほど危険な銀色の光を放っていた。

「見つけた」

アンドロイドが近づいてきて、冷たい手でタイガの手首をつかんだ。

「私はアリス。あなたを所有者として認識しました」



夜が開けようとしていた。

研ぎ澄まされた青いエッジのように、光が孤を徐々に形作っていく。アフリカサバナでは動物たちが目を覚ました頃であろう。

タイガは夜明けを見るのが好きだった。だから時々、こうして木々に囲まれた展望デッキへ来て地球が闇から生まれる瞬間を眺めていた。いつもタイガは思うのだ。なぜ、展望デッキを暗い森の奥に設定してしまったのかと。暗い森は単なる映像だから、何も不安になることなどないのだが、いつも森を抜ける時は神経過敏になった。だが、この暗い森をは、タイガが心のどこかで必要としている暗がりなのだと思う。この暗がり抜けると、タイガはいつでも純真な気持ちになれると感じていた。

ふと、コーヒーの香りに振り向くと、傍にアリスがカップを持って立っていた。モーニングコーヒーを運んで来てくれたのだろう。

アリスがコーヒーを黙って差し出した。差し出した手はサイズの合わないタイガのシャツに、ほとんど隠れてしまっていた。

アリスは実に良くできたアンドロイドだった。精巧という意味で。その人間と変わらぬ出来栄えには驚くしかない。乗って来たカプセルからみて、作られたのは相当前のはずだが、最新式以上といっても過言ではない。

ただ、中身が古いせいかわからないが、少しアリスは変わっていた。

アリスは決して椅子に座らなかったし、瞬きをまったくしなかった。銀色の瞳で見据

えられると居心地が悪くなった。そして時々左足を持ち上げ、片足立ちをした。理由を聞いても、認識していないのか、首をかしげるばかりだった。

そして近づいて来る気配がまったくわからなかった。OBSからの情報ばかりに頼っているため、集中している時などは後ろにつかれてもわからないことが多かった。ふと気が付いて反射的に拳を振り回してしまう時があるが、その拳は虚しく空を切った。反射スピードでは全くかなわなかった。OBSに繋がっていないので、アリスの内部情報を読み取ろうとしてもできないし、設定変更しようにも世界中検索してもマニュアルが見つからなかった。

何よりも気味が悪かったのは、アリスには普通のアンドロイドにない何かがあった。それが何なのかわからない。敢えて非難されるのを覚悟して言葉にするならば「生命」というのが一番しっくりする。アンドロイドには生命はないし、意識もないというのが通説だ。どんなに高度なアルゴリズムを持つアンドロイドも、意識の問題については人々を満足させる回答を出したものはない。

かの政府アシストコンピューターのアテナスですら、どんなに理知的な回答を弾き出したとしても、そこに生命を感じさせることはない。アテナス自身が電氣的な反応による回答と宣言しているのだ。だからこそ、効率最優先の回答が出せる。アテナスはこう言っている。

「私たちの望みは人々が暮らしやすいと感ずることだ。しかし、それが必ずしも幸せとは言えない。なぜならば、私たちは幸せという言葉の定義をまだできないでいる」

だが、アリスにはそういった効率優先もないし、クリスティのような卑屈さもない。どこか超然とした態度が、生命を感じさせるのかもしれない。

タイガはアリスを僅かに見て、諦めたように言った。

「黙って後ろに立つなよ」

アリスはいつもの様に、わからないとでも言いたげに、首を少し傾げてみせた。

地球に青みが射し始めたので、タイガは朝の点検を開始した。

毎朝やることは決まっていた。日本上空に浮かぶ十基のマッシュの、運用状態を監視するのである。慣れた今ではOBSで十基同時にマッシュを監視できた。そして着任以来、たいしたトラブルは発生していなかった。今日もすべての順調だ。小一時間もあれば、全ての確認作業は終了するだろう。いつも同じ結果である。やってもやらなくても何も変わらない。

だが、他にやることも無い。

毎朝、地球の出を眺め、朝の点検をして、オープンカフェの映像の中で朝食を取り、そしてのんびりする。

「コーヒーはいかがですか」

アリスはよくタイガに際限なくそう尋ねた。

「いや、もういらん」

そう答えても、数分後にはまた同じことを尋ねるのだった。最初は腹も立ったが、今では諦めていた。怒っても何も変わらないからだ。

アリスは微笑むでなく、じっとタイガが食事する様を、立って眺めていた。

時折、どこか物欲しそうな目をするのがあった。試しに食べるかと訪ねると、目の色に欲求との葛藤が現れ、そしてすぐに消えた。実際、アンドロイドが食事をするはずもない。

アリスは実に奔放だったし、無邪気であった。

しかし、アリスは無邪気なだけではなかった。無邪気な上にいたずら好きだった。

アリスはよく手動の操作パネルから様々な操作を、結果を気にもせずに行っていたし、闇雲にマッシュの無重力エリアを飛び回り、機器を破壊したりした。

その都度、タイガはアリスを捕まえようと躍起になったが、アリスは決して捕まらなかった。OBSさえ繋がってれば、機能停止などいとも簡単なのだが、タイガのストレスは増すばかりだった。

そんな折、タイガをひどく不安にさせる事件が起きた。地上からの定期便に、未登録の荷物が積載されていた。定期便の荷物を登録したのはタイガ自信である。積載物は主に不足した日用品や、修理用の機材である。その中に、ワンケースのウィスキーが紛れ込んできた。これはありえないことであった。

宅配荷物はマインドバリューと関係があり、アテナスが管理している。つまり注文は個人IDの一部になる。だが、タイガの個人IDにウィスキーの注文記録はない。

つまり、タイガの個人IDと実際に違いがあるということだ。

もし、これがタイガの個人IDだけであれば、限りなくゼロに近い可能性でも考えられなくはない。

だが、検索してもどこにもウィスキーの注文も発送も記録がない。にもかかわらず、現物だけが目の前にあるのだ。こんなことはありえない。物が動けば、どこかに記録が残るはずなのだ。

送り返そうと思ったが、一体どこに送り返せばいいのか。

タイガは急に背筋が寒くなった。

つい先日も裏返し事件が発生していた。

被害者の記録はどこにもなく、DNAが破壊されて個人の特定ができない。世界中が否定しているのに、裏返された死体だけが、その存在を主張し続けている。私はここにいると。

タイガはそら寒いものを感じながらも、ウィスキーの木箱をクリスティに処分させた。存在の否定されたウィスキーはやがて、廃棄品と一緒に太陽に向けて発射されるはずだ。そして消滅し、はじめから無かったことになる。

しかし、タイガの心にしこりのように残った記憶は、決してなくなることはなかった。忘れようとすれば、忘れることもできただろう。だがそうはならなかった。またして

も定期便に不気味な荷物が積載されてきた。どこにも記録のない荷物。ケースの日本酒。逸品の桐筑波であった。

それから、タイガの生活は少しずつ変化していった。

タイガは過去にダウンヒルレースを通じて、肉体と精神を鍛え上げてきたと自負していた。酒も飲んだが、飲まれたことはなかった。年に数度、羽目を外した時以外は。なのにここ数日は、毎朝二日酔いの状態でクリスティに揺り起こされる始末だ。午後になれば、夕方から飲む酒のことで頭が一杯になり、飲み始めれば、夕食のことなどもうどうでもよくなっていた。ベッドサイドにはいつも酒瓶が置かれていた。存在しないはずの酒。幽霊酒である。

ある夕刻、タイガは酒を飲みながら地球が闇に飲まれていく様を黙って見ていた。地上には宝石を撒いたように、都市の明かりが煌めいていた。美しいのだが、タイガはどこか儚さを感じた。全てが虚像のように思われた。タイガはそっと鎖骨の間の、親指大の膨らみに指を這わせた。指でなぞるたびに、微電流が身体を包むような感覚があり、意識がじわじわとテラネットにのまれていく。

一瞬後、タイガは完全にテラネットに融合していた。不思議な事に、テラネットの中では酔っているはずの意識が澄み渡っていた。見回す必要もなく、360度全ての方向に意識を向ける事ができた。あらゆる方向から、猛烈な勢いで情報が流れ込んでくる。今日起きた出来事や知った人の思考が流れ込んでくる。だが、そんなことは全て知っていると思う。

どこかの、男と女が融合しあっている。融合することで、意識が一体化し一つの人格になる。またどこかの男が、一体化した人格に潜り込む。今度は別の女が融合する。そしてまた.....。

こうして薄っぺらな個人は完全意識へと向かう。

だが、タイガは友人と融合し、交友を深めるることはあっても、どうしても完全意識に融合する気になれなかった。完全意識への融合の先には何があるのか。融合した人間は言う。それは「完全」であると。しかしそこにはもう個人はない。個人のない完全に意味があるのだろうか。

タイガは無重力の空を漂うように、テラネットを漂った。新しい情報などなにもない。全て知っている。あらゆる可能性がここにはある。全ての重ね合わせが存在し、無限遠へと意識の鎖が伸びている。量子が紡ぎだす無限という意味。全てを選択でき、全てを否定もできる。未来も過去もあるパラレルワールド。それがテラネット。

ふと、何かの気配を感じた。360度全てに意識を向けてみても、何も無い。にもかかわらず、確実に何かはタイガを見つめている感じがある。それが何なのか分からない。虚像なのか残像なのか。ネットワークにはゴミが漂っているが、ゴミは気配を持たない。気配は存在を主張するから生まれる。センサーに手をのばせば、虚数ですら感じることができるのに、その何者かは決して姿を見せない。

だが、タイガはそれが何者なのか、漠然と知っていた。一人の僧侶である。そういう気がするのだ。

僧侶は百年も前に亡くなっていた。だから、テラネットに存在するはずもない。最早ただの記録にすぎない。にも関わらず、時々そういうたぐいの話を聞く。人々はそれを幽霊と呼ぶ。幽霊は二十二世紀でも解明されていない。

「またあんたか。今日もまた俺を見詰めるだけか」

タイガは独り言のように言う。

無論返事はない。

しかし、どことなく、僧侶がタイガに意識を向けているように感じる。どこか温かみのある目で見つめられている気がした。

やがて僧侶の気配は地面にしみ込むように、テラネットのどこかへ消えていった。

人々が集まり 完全意識が出来上がりつつあった。

タイガは完全意識が人間を超えとは思わなかった。全てを包含するテラネットすら、酷くちやちな世界に感じた。タイガは背を向けるようにテラネットから降りた。胸元に疼くような痺れが残った。

「それは何？」

タイガが慌てて振り向いた。

アリスだった。

「いつからそこに居た。いい加減、その泥棒猫みたいな真似はやめにしろ」

タイガがアリスを睨みつけた。

「私は猫じゃないわ」

「ふざけやがって」

タイガは満身の力でアリスに飛びかかった。

アリスは避けなかった。まともにタイガのタックルを受けて、床に叩きつけられた。それでもアリスは悲鳴一つ上げずタイガを見つめていた。

「馬鹿にしやがって」

タイガはアリスを殴りつけた。何度も何度も殴った。だが、どれ程力を込めて殴ろうと、アリスの顔に傷一つつける事はできなかった。

タイガは振り上げた拳を力無くおろした。そしてアリスから離れると、壁に凭れて泣いた。

「なぜ泣くの」

「うるせえ」

アリスはそっとタイガの背に寄り添った。そしてタイガの鎖骨の間に指を這わせた。

「触るな」

ぽつりとつぶやくタイガに、いつもの強気さは無かった。

アリスは人差し指で円を描くように膨らみをゆっくりと撫でた。

「ファクターXね」

「ファクターX？何のことだ」

「第三世代のOBSポートのことよ。材料にTストーンという青く美しい石が使われている。あなたもレベル3まで昇るのでしょうか？」

タイガは自嘲気味に笑った。

「昇り切れなかったから、ここにいるのさ」

アリスはいつの間にか服を脱ぎ捨てていた。そしてタイガの頭を抱きしめた。温かかった。

「かわいそうなひと」

アリスが唇を重ねてきた。

「なぜ...」

「恐れてはだめ。さあ、怖がらずに来なさい。あなたには資格がある」

アリスはそう言うとタイガを導いていった。

「資格...」

タイガはそう呟き、全てをアリスに委ねた。

そこにはもう、人間とかアンドロイドとか、そういう気持ちはなかった。タイガはただただ温もりが欲しかった。



暗がりの中でタイガは目をさました。

窓の外では地球が朝を迎えようとしていた。だが、まだ少し早い。

傍ではアリスが丸まって眠っている。実際眠っているのかはわからないが。

タイガは喉の乾きを覚えて部屋を出た。水をひとカプセル飲むと気持ちが落ち着いた。わずかに身体が震えた。寝起きのせいだろう。

ふと、扉の向こうに誰かがいるような気がして一瞬不安になった。頭の奥でチップが疼いていた。チップは第三世代のOBSを扱うため埋め込んだものだ。だが、第三世代は今やそんなチップなしでも扱える。自分の細胞を増殖させて、バイオモジュールを造ることができる。機能はひと世代前のチップ程度だが。それでも早まったことをしたと思う。特に今日みたいにチップが疼く時には。そしてその疼きが、時々不安を煽る。

OBSで廊下をサーチしてみるが、当然誰もいない。いるはずも無い。マッシュにいた人間は自分だけなのだ。

タイガはもう一度寝直そうと部屋に戻りかけたが、再び廊下に何かの気配を感じた。センサーがOBSを通して何かを訴えてくるが、それが何なのかわからなかった。第三世代でも拾えない何か。

以前にもこんな感覚があった。そう、タイガがまだレースをしていた頃に。

タイガはかつてレースで負けなしであった。

チャイニーズダウンヒルというレースは実に過酷なレースだった。エアコンプレッサ

一しか装備しない流線型のマシンと身ひとつで、時速千キロメートルものスピードで地面に突っ込むのだから。ゴールリングを潜った後の、急な旋回運動によるGで失神する選手も多い。もちろん失神すれば彼の世行きである。

そんなレースを、タイガは改造した強靱な肉体と、度胸と、そして天候を読む抜群のセンスとで乗り切ってきた。

だが、ある日を境にタイガの優勝は徐々に減っていった。OBS第三世代の登場により、ライディングマシンだけがタイガに並走して飛ぶようになったのだ。今までもOBSによるマシンだけの出場はあったが、実際に天候を読み、わずかなコース取りの動きをするには、OBSでは役不足であった。

ところが、新しいOBSは違っていた。タイガが感じ取っていた、わずかな空気の流れや、気温差による抵抗の違いを感じ取る事ができた。

タイガはライバルたちの動きを、気配で判断していた。だが、ライダーが乗らないマシンは空気抵抗も少なく気配がしない。ふと気がつく、マシンだけが横にいるということが度々あった。OBSでサーチしても、世代の違うそれらを正しく認識することはできなかった。タイガは何度も背後を取られ、ゴール寸前でかわされるという屈辱を受けることになった。タイガも限界までコースを死守するのだが、地上に激突しないぎりぎりのコース上に設置されたゴールリングに、死の恐怖を感じずに突っ込むマシンを相手にするのは限界があった。

タイガはある時、自分のライバルが一体どんな人物なのか、実際に会いにしてみることにした。いつもゴール寸前で、軽々とタイガをかわしていくタチバナトモエという選手は、まだ二十歳にもならない少女だった。少女はろくに外にも出ないので、痩せこけていて、ひどい匂いがした。そして、異様に光る大きな目を持っていた。

タチバナトモエはタイガの目の前で、指先大の小さな機械人形を数百体同時にOBSで操り、巨大な鬼の顔を作って見せた。そして光る目でタイガを見た。

鬼が、

「お前は勝てない」

と言った。

その時、タチバナトモエの目にあった光は、決して忘れることができない。その光は間違いなく狂気。タイガがゴールリングを潜る直前に見せる光と同じである。それが何を意味するのか。タチバナトモエはOBSでマシンの中にマシンとしての死の恐怖を嗅ぎ取っている。マシンは破壊を恐れない。そこから死を嗅ぎ分けることは、常人の意識の範疇ではない。

タイガはそれを境に引退をした。

だが、引退してすぐに、タチバナトモエは消えた。

タイガはオダギリトシオというレーサーに負けて引退した事になっていたし、タチバナトモエなどというIDはいくらさがしてても見つからなかった。タチバナトモエの

家には別の人間が二十年前から住んでいた。

そして、まったく同じ時期に発生した「裏返し事件」。裏返されたのはタチバナトモエなのではないか。

あの時の、うなじの辺りがちりちりとする感じ。それでも、何が原因なのかわからず、苛つく感じ。そんな感じによく似ていた。

タイガはドアを開けた。暗い廊下に明かりが灯っていく。一キロメートル先の、遙か彼方まで明かりを点けてみても、孤独が募るだけで何も得るものは無い。タイガは首を振って、部屋に引き返そうとした。その時、一瞬視界の隅に何かを捉えた。慌ててそちらに目を向けるが、何もいない。今度はしばらく目を凝らしてみた。だが、それは二度と現れなかった。タイガは寝起きのせいと決め込むことにしたが、そうではないことはわかっていた。心の奥底の澱みを掻き回してしまった気分だった。

そして、タイガは思い知らされることになった。

その晩、タイガは眠れずにベッドに横たわったまま星を眺めていた。

「眠れないの？」

アリスの問いかけを無視しているとアリスは、

「足りなかったのかしら」

とイタズラっぽく笑い、ブランケットの奥へと潜り込んでいった。

「よせ。そんなじゃない」

タイガは乱暴にアリスを押し除けると、ズボンを履いて部屋を出た。

ディスペンサーで水のカプセルを取り出したが、結局飲まずにウイスキーの瓶に手を伸ばした。

眠れない日が続いていた。食欲も落ちていた。そしてなにより、間違いなく何者かの気配をタイガは感じ取っていた。OBSではなんだかわからない何か。まるで壁の向こうの息遣いを聞く様な、偶然みつけた猛獣の足跡のような形跡が、OBSの先端を掠めてゆく。

「どうしたの」

アリスが戸口に立っていた。

「なんでもない」

アリスはタイガのウイスキーを取ると、イタズラな笑みを見せそれをガブ飲みした。そしてタイガの前に立ちはだかると、片方の乳房を持ち上げて、

「吸って」

と言った。

「そんな気分じゃないと言ったろう」

「いいから」

あまりにせがむので、タイガはアリスの乳首を咥えた。乳首からウイスキーが染み出

てきた。

「何考えてやがる」

タイガはアリスを突き飛ばした。

アリスは肩をすくめてベッドルームに戻った。

「ちくしょう」

タイガはウィスキーの瓶を掴むと壁に叩きつけた。瓶は砕けて壁一面を汚したが、気分は晴れなかった。

タイガはOBSでマッシュのあらゆるセンサーを監視し始めた。もう何度もこうしたかわからない。だが、今日は必ず見つけるつもりだった。コントロールセンター、発着ドック、太陽パネル区画、マッシュの隅から隅までをサーチしてゆく。

そしてついに見つけた。

ベッドルームのわずか数メートル先の廊下に何かがあった。OBSでは分からない何か。

タイガは部屋を飛び出した。

同時にOBSが、何者かの黒い影が逃げたことを知らせてくる。

恐怖が心の奥からわき上がってくる。

ネットの幽霊の噂。マッシュにはサーチできる人間はタイガしかいない。にも拘らず、センサーに反応する何者か。直感でタイガはそれが夢で見る僧侶ではないかと感じた。あの僧侶がついに姿を表したのだと。

いや、そう思いたかっただけかもしれない。

「くそ坊主。待ちやがれ」

タイガは裸足のまま、廊下を全力で走った。

しかし、心の奥底では心底怯えていた。追いかけたくなどなかった。黒い陰の正体など、本当は知りたくもない。でもそんなのは腰抜けだと認めることだ。だから必死で足を動かした。

黒い影はあわやというところで、その身を翻し、タイガの視界からすり抜けていく。業をにやしたタイガはOBSで通路の扉を閉めていった。そうして黒い影を袋小路に追い込んでいくのだ。黒い影は逃げる先々で進路を断たれ、ついにマッシュの動力区画に逃げ込んだ。即座に目の前以外の動力区画の扉を全てロックする。袋のネズミということだ。

タイガはゆっくりと動力区画へ足を踏み入れた。

動力区画は無重力エリアだ。裸足で追いかけてきたため、身体が浮かび上がり始めた。退路を断つため、取り敢えず扉を閉めてロックした。身体を動かそうとして初めて、姿勢制御装置を何も身に付けていない事に気がついた。タイガはたちまち無重力の餌食となり、動力区画の広大な空間に漂うことになった。

「ったく。ざまあねえ」

毒づいてみたが、本当は死ぬほど怖かった。即座にOBSでトランスポーターを呼び寄せる。何かをコントロールできる状況にしていなければ、気が狂いそうだ。

だが、トランスポーターは反応しなかった。マニピレーターにアクセスする。これも全く無反応。クリスティにも連絡は取れなかった。泥のような恐怖が全身を包む。今まで経験したことのない、奇妙な感覚であった。絶対零度の海に投げ出されたような、絶望的な孤独感。

OBSが切れていた。

そして区画の照明が落ちた。

タイガはパニックで絶叫し始めた。

だが、叫ぼうが、藻掻こうが、何もできない。ただ濃密な、上も下も分からない暗黒の中で、タイガは絶叫し続けている。その絶叫すら、闇に吸い込まれていき、本当に自分が声を出しているのかすら分からない。そもそも、自分の存在そのものが怪しく感じられ、息をしていることさえ不自然に感じられ、急に呼吸が苦しくなった。

意識がもうろうとし始めた時、ふいにこめかみに痛みを感じた。何か硬いものがぶつかったようだ。手を当てるとぬるりとした感触があった。血が出たらしい。

血を触った瞬間に、タイガは正気を取り戻した。自分は何度も経験をした世界にいると感じた。時速千キロメートルで降下しながら、肉体をぶつけ合う世界。夢などでは決してない、現実の痛み。闘争本能が瞬時に決断を下す。パニックは去り、タイガは五感を研ぎすました。

何かの気配がした。

手をあげたが遅かった。

再び何か硬いものが頭に当たった。硬い金属の何か、工具か何らしい。

「誰だ。くそ坊主か」

叫べど返事はない。

タイガは前方に意識を集中した。

何かの気配が徐々に強まって行く。

やがてそれは一つの形をかたどって行った。

そしてそれが完全に姿を表した時、タイガは戦慄を覚えた。

小猿ほどの、真っ黒い小人。

帰ってきた。あの黒い小人が帰ってきた。

タイガは好調な時期に何度かレースで負けたことがあった。成績に影響するほどではなかった。誰もが単に不調だと考えていた。タイガ自身そう思おうとした。だが、実際はレース中に黒い小人たちに襲われたのである。身体中にまとわりつく黒い小人は、タイガの感覚を狂わせた。ほんの僅かな誤差が勝敗に影響する中で、前後もわからないのでは勝てる道理がない。黒い小人が何なのか結局わからなかった。だが、タイガがコースアウトする直前、黒い小人が見せた不適な笑み。それはタイガ自身の顔だった。

レースから引退すると黒い小人を見ることはなくなった。

黒い小人は暗闇の中なのに、はっきりと姿が見えた。そして空中からこちらを見つめていた。それはひどく頭が大きく、年老いた猿のような顔をしていた。皺だらけの顔の真ん中で、意地の悪そうな目がじっとタイガを見つめていた。

タイガの頭の奥の方がちりちりと痛み始めた。脳裏にふとタチバナトモエの顔が浮かんだ。存在を失って死んだタチバナトモエ。人の形の肉になってしまったかもしれない少女。

急に暗闇が重さを持ったように感じた。体中が圧迫され、息が詰まった。

「助けてくれ」

誰かがタイガを後ろからぐいと引っ張る。途端、奈落へと落ちて行くのを感じる。暗くて寒い井戸のような深い穴。

手を振り回したが誰もいない。なのにももの凄い力で首を掴まれ、引かれ続けた。

目の前で黒い小人がにたりと笑った。暗がりの中、黒く浮かび上がった顔がひどく大きく見えた。

タチバナトモエ。タチバナトモエ。存在しない少女。

もしかして、タチバナトモエはこうやって、裏返されたのかもしれない。恐怖が心の奥底で爆発した。

黒い小人の笑みがますます大きくなった。そして最後にはタイガ自身の顔になった。

やがて黒い小人は小さくなり、見えなくなった。

次の瞬間、タイガは砂漠に立っていた。

「ここはどこなんだ。」

熱風が吹き抜けていった。どこまでも砂の波が続いていた。

タイガは砂丘の一つに登って見た。遥か遠くに何かが見えた。目を凝らすと、それは一本の木だった。砂漠の真ん中に、ぽつりと木が生えている。そしてその木の下に、何かがあるらしいが、判然としなかった。

タイガは木に向かって歩きはじめた。何か情報が得られると思ったからだ。砂丘を下ると、たちまち方向感覚が失われた。多少遠回りでも、砂丘の尾根伝いに進んだほうがよさそうだ。再び砂丘を登り始めた時、猛烈な砂嵐が沸き起こった。視界の全てが黄色い砂で覆われ、上下の区別もつかなくなった。

「ちくしょう。今度はなんだ」

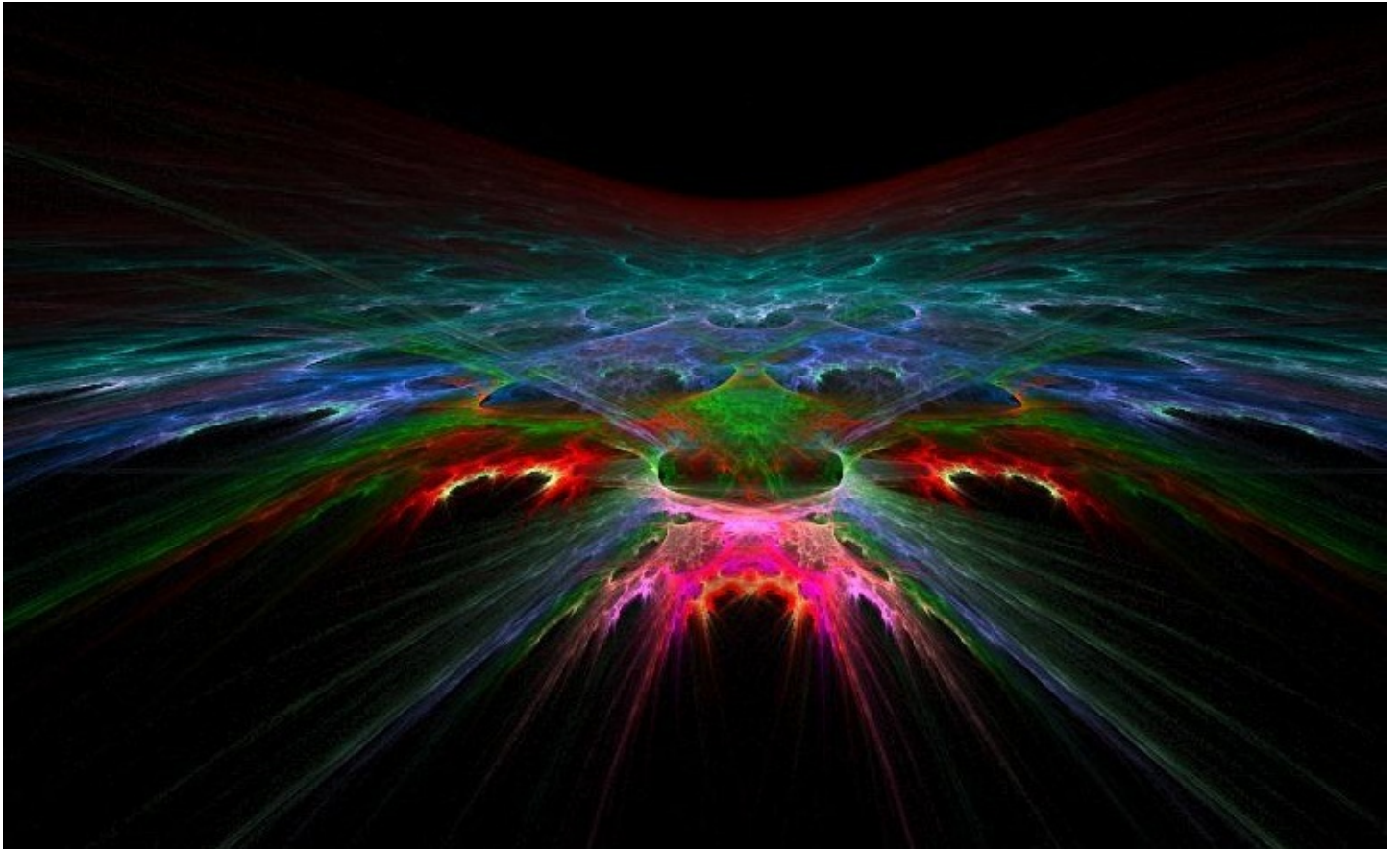
砂嵐はタイガを包み翻弄した。硬い風が体中をたたいた。目を開けることもできず、タイガは膝をついた。

やがて風が徐々に収まり、砂嵐が止んだとき、タイガは自分の部屋のベッドに横たわっていた。そして、傍らにはアリスがいてタイガを銀色の目で見下ろしていた。

「もう大丈夫よ」

アリスはそう言うと、タイガの額に手を当て、優しくなでた。

あたたかな手の温もりに包まれ、タイガは眠りに落ちて行った。



夢を見ていた。

そこはひどく寒々しい場所だった。

曇り空の下、どこまでも広がる荒地に、一本の裸の木が生えていた。ろくに養分も無さそうな場所であるのに、木にはたくさんの実がなっていた。

タイガは自分がその木になっている実の一つだということを理解していた。枝先が柿のように頭につながっていた。だが、なぜそうなのかは分からなかった。

隣にはやはり柿の実と同じ大きさの、裸の男がぶら下がっていた。男はふてぶてしい顔をしており、同じ様に頭が枝にくっついていていた。みれば同じような男や女が、あちこちにぶらさがっていた。何とも奇妙な光景だが、不思議とは感じなかった。

隣の男は口をひらけば自慢話ばかりをした。力では誰にも負けなかったのだ、女を何人も泣かせてきたのだ、どうでもいい事ばかり、延々と喋っていた。

タイガがいい加減うんざりしていると、急に隣の男が静かになった。見ればすぐ上の枝に、大きな鴉が止まり、じっと隣の男を黒い瞳で見据えていた。

男は目を合わせないよう黙って俯いていた。

鴉は枝から枝へと移動しながら、男に近づいていった。そして判決でも言い渡すかのように、ひとつ大きく鳴いた。

「待ってくれ。俺の話聞いてくれ。俺は悪い事などしじゃないんだ」

男が慌てて言い訳を始めたが、鴉は男を黒光りする嘴で啜えた。

男は必死に抵抗したが、全く敵わなかった。

鴉が男を枝から引きちぎった。

男が悲鳴を上げた。

鴉は二、三羽を羽ばたかせると、一気に曇天の空へ舞い上がり、何処かへと飛び去った。

男がどこへ連れていかれたのか考える気にならなかった。

しばらくすると、さっきの鴉なのか、べつの奴なのか、また鴉が一羽タイガの近くの枝に止まった。

タイガは自分が冷や汗をかいているのが分かった。身体中から滝のような汗が流れていた。

鴉はタイガの方を見ていた。

タイガも見返した。真っ黒な瞳の奥に、青い光が見えた。

いつしか、鴉はどんどんと巨大化し、全天を覆うほどになり、そして全てを覆いつくす闇へと姿を変えた。

闇の中から、鴉の鳴き声がひとつ響いた。

終わりだと思った。

暗闇で青い光がぐるぐるとまわっていた。頭の中のチップが熱を帯びてずきずきと痛んだ。

次の瞬間、タイガは明るい世界に放り出された。

そこは果てしなく広い不毛の大地だった。どこまでも白く乾いた大地が広がっている。そして空を埋め尽くしているのは、無数の歯車だった。歯車はどれも噛み合いながら回っていたが、めまぐるしい勢いで、ギアを切り換えるように組み合わせを変更し、蠕動するがごとく蠢いていた。

目の前に一人の男が立っていた。男は金色の髪を風になびかせ、涼し気な、そしてどこか寂しそうな眼差しをタイガに向けていた。

「お前は誰だ」

タイガの問いかけに、男はまったく反応を見せず、ただ寂しそうな眼差しを向けただけだった。

「ちくしょう、ここはどこなんだ。鴉はどこへ行った」

頭上では歯車がガチャガチャと組み変わる。そして男はゆっくりとタイガに背を向け、歩み去っていった。

「おい、待て」

振り向いた男の顔は小さな歯車がひしめいていた。

「うわああっ」

そして目が覚めた。ぐっしょりと汗をかいていた。タイガは起き出すと、水のカプセルをいくつも飲み込んだ。夢は急速に霧散していったが、本当に夢だったのか自信が

なかった。

コントロールルームへ行くと、ちょうど定期便が到着したところだった。

タイガは胸さわぎを覚えた。

リストは日用品となっていたし、コンテナのサイズもそれなりだった。コンテナがドックから運搬され、部屋に届くまでの間、タイガは何度かそのまま送り返そうかと思った。だが、結局タイガはコンテナをテーブルの上に置いた。そして、しばらく腕を組んだままにそれを睨みつけていたが、アリスに促されてようやくロックに手をかけた。

「なんてことないさ」

眩きながらフタを開けた途端、黒い何かが飛び出してきた。

「鴉だ」

タイガは悲鳴を上げて飛びのいた。

「俺は何もしていない」

タイガは次の鴉の嘴を避けるため、顔を腕でかばったが、鴉はターゲットを変更し、アリスに飛びかかった。

「気をつけろ。そいつは……」

そこまで言って、様子に変なことに気がついた。

鴉に見えたそれは尻尾を勢いよく振っていた。

アリスが抱き上げたそれは、黒い仔犬だった。

タイガは気が抜けて、その場に座り込んだ。

「ちくしょう。何で犬なんか」

今まで何度も想定外の荷物を受け取った。全てOBSで発送時から確認していたにも拘らずである。

タイガはよっぽど送り返そうかと思った。だが、結局送り返すことはできなかった。どこにも発送記録がないのである。紛失届けや保健所も調べたが、該当する仔犬がいなくなった記録はなかった。

そもそも、何の目的か分からないが、タイガを陥れようとしても、随時更新されて途切れのない個人IDを勝手に使用することは不可能だ。もちろん偽装しようとする側にとっても、その人物の個人IDに偽装をしている記録が残ってしまう。だから、事実上データ改ざんはこの世から消えたはずである。

定期便の管理は宅配便業者が行っているし、OBSによる予約も宅配便業者のコンピューターが管理している。それだけであれば、多少のプログラムミスがある可能性も無いではない。しかし、全ての通信は一旦政府のアテナスを通る。個人IDを管理するためである。あらゆる行動が記録される。ここにミスはあり得ない。OBS普及以来、人類は全智となった。全ての知識と記録は検索ができる。だが、判断をするのは人間自体だから、全能ではない。しかし、アテナスの正確無比、意識の介在しない無慈悲なまでの効率性は全能と言えるだろう。

そのアテナスの記録にない荷物が届けられている。それは手に持ったコップの中身が、見ている目の前ですり替わるようなものだ。

暫く悩んだ末に、タイガは考えるのを止めにした。アリスがやって来て、生活が変化したことは間違いなかったが、どこかで本物の温もりを欲していたのも間違いなかった。

仔犬とはいえ、血が通った生き物である。タイガは仔犬を抱き上げた瞬間から、その仔犬を飼うことを決めていた。

仔犬の名前はアリスが決めた。「ゼン」という。「善」という意味だ。本来ならば飼い主であるタイガが決めるべきであるし、そうするつもりだった。タイガは「コン」と名前をつけるつもりだった。

理由は、ゼンは何か数種類の掛け合わせらしく、顔が柴犬っぽく、胴体はダックスフントのような中途半端な姿だった。どこか混血じみていたので「コン」とするつもりだった。

ところが、アリスは最初から「ゼン」と呼んだ。そしてゼンは「ゼン」と呼ばれたときだけ反応した。いくらタイガが「コン」と呼んでも見向きもしなかった。

ゼンはアリスと対照的に物静かな犬だった。いつも床に這いつくばり、値踏みするような目でタイガをじっと見ていた。まさか観察している訳ではないだろう。仔犬特有の無邪気な行動はあまり見られなかった。それでもタイガは血の通うもの同士、ゼンを可愛がり癒されていた。あのことが起こるまでは。

ある朝、タイガはストックの酒がかなり減っているのに気が付いた。タイガの飲酒はかなり酷いことになりつつあったが、まだ数量の管理ができなくなる程ではなかった。

減っていたのはタイガが楽しみにしておいた、桐筑波の純米酒ばかりであった。これが一本残らずなくなっていた。

アリスを探していると、驚いたことに、倉庫の隅でアリスがゼンの器に桐筑波を並々とつぎたしており、ゼンはうまそうに器から酒を飲んでいた。

「何している」

慌てて駆け込んできたタイガにアリスは、
「美味しそうに飲むでしょ」
と微笑みかえした。

「ばかやろう。そいつは手に入れるのが大変なんだぞ。犬なんかに飲ませるやつがあるか」

アリスは一瞬「わからない」という顔つきをしたが、
「私が飲んでいたので少しあげただけよ」
と言った。

「私が飲んでいた？」

驚いたことに、アンドロイドが嘘をついたのだ。タイガは器を取り上げた。透明な液

体が灯りに煌めいた。たくさんの犬の毛が浮いていた。タイガはため息をついた。

「今度こんなことしてみろ。宇宙に放り出してやるぞ」

だが、アリスはゼンに酒を与えることを止めなかった。それはタイガが酔いつぶれている時間を見計らって行われるようになった。倉庫の日本酒はあっという間に品切れとなった。

次の定期便に乗って来たのはタバコだった。タイガはタバコは吸わないし、吸いたくとも思わない。そしてそのタバコを燻らせるようになったのは、驚くかなゼンだった。アリスが火を点け啜えさせているのだ。

最早定期便に頼みもしない荷物を乗せるのは、アリス以外にあり得ないという結論だが、どうやってタイガのIDを使っているのか、どうやって記録を改ざんするのか謎のままだった。

そんな生活には慣れ始めていたが、同時に黒い小人の姿を度々目にするようになった。それは通路の暗がりやに座り込んでいたり、物陰からタイガをじっと見詰めていたりした。そしてタイガが振り返ると、わずかな気配だけを残して、霧のように消えてしまった。

ある時、黒い小人がまたしても現れた。洗面台の鏡の隅で、そいつはタイガを見てにやりと笑った。

タイガは血の気が引いたようになり、ひどい目眩を起こした。次の瞬間にはタイガはまたあの砂漠に立っていた。

鴉の影を気にしながら、灼熱の砂丘をタイガは黙々と歩いた。じっとしていても太陽に焼かれるばかりなので、遠くに見える木を目指すことにした。なかなかアリスは迎えにこなかった。何度かアリスの名を呼んでみたが、声は熱風にさらわれるばかりであった。

遙か遠くの木は徐々に近づきつつあった。暑さでいつ倒れるかと思っていたが、足取りは予想以上に確りしていた。木の形がみて取れるようになると、砂漠でありえないことだが、その木がもみの木であることがわかった。もみの木の下には小さなバーカウンターがあり、二つしかないスツールの一つに男が座っているのが見えた。

「おーい」

男が振り向いた。右手に冷えたビールのグラスを掲げている。

「行ってはだめ」

ここでタイガはアリスに引き戻された。タイガはアリスに怒りを感じた。冷えたビールが脳裏に焼き付いていた。

「あの男はあなたの敵よ」

「もう少しでビールが飲めたんだ」

アリスがタイガの頬を両手ではさみゆっくりと言った。

「それがあいつの手なの。あなたの弱みを知っている」

「あいつって誰なんだ」

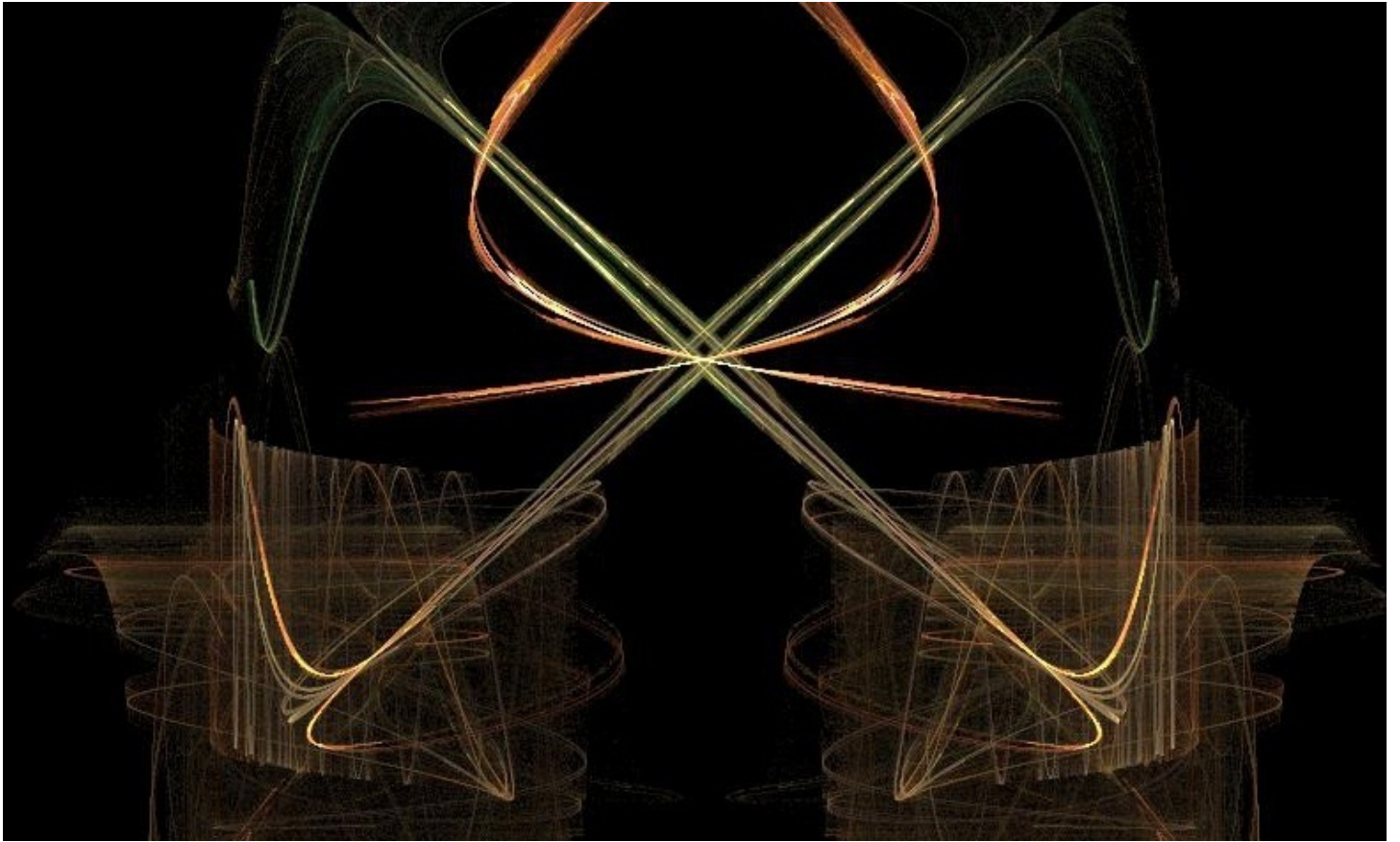
アリスはその問いには答えず、暫く黙った末に、

「ある人に会って欲しいの。あなたの未来を左右する人よ」

「俺の未来だって？」

「そう、あなたの未来」

アリスはそう言って大きく目を見開いた。銀色の瞳が光った。



アリスに連れて行かれた先はいつもの倉庫だった。倉庫にはいるとタバコを啜えたゼンが首を上げた。倉庫はすっかりゼンの部屋となっていた。

アリスはゼンの方に歩いていった。

「で、俺は誰と会えばいい。OBSでどこに行けばいい」

「会うのはこの人よ」

アリスが指し示すのはゼンだ。

「おい、冗談はよしてくれ」

「冗談やないで」

言葉を発したのはゼンだった。

「ワイがあんさんのこと呼んだんや」

ゼンはそう言うとタバコの煙を吐き出した。

一部の飼い主の間ではペットに人間の言葉を喋れるようにする物好きがいる、という話は聞いたことがあった。だが、いくら機械を付けてみたところで、会話というのは知能が関係する。犬ならせいぜい「エサ」と「遊んで」くらいが限度であろう。ゼンの言葉は犬の言葉とは思えなかった。

「そう驚くなや」

ゼンはそう言うと、トコトコとタイガの前までくると、そこに寝そべった。

「ここじゃあ何や。ワイのオフィス行こか」

驚くタイガを他所に、ゼンは目を瞑ってしまった。

突如アリスがタイガの顔を両手で掴んだかと思うと、唇を重ねてきた。

「ムグ、何を……」

直ぐに頭の中にアリスの声が響いてきた。

「私に付いて来て」

次の瞬間、空中楼阁のようなテラネットの中を、アリスと猛烈な速さで飛んでいた。

「どこへ行くつもりだ」

アリスはその問いには答えず、ある一つのコミュニティをめざしていた。

そのコミュニティは輝く角のようなものが、四方八方に伸びていた。かなり多くの人のコミュニティだと分かった。その光に飛び込むと、タイガは街路樹の続く路に立っていた。木々の間から木漏れ日が射し、爽やかかな風が頬を撫でた。遠くで子供達が遊んでいる。季節は夏から秋に移り変わろうとしている。陽が陰ると少し涼しくなった。

「こっちや」

声のする方を向くと、アリスと一緒に一人の男が立っていた。ゼンの声と同じだ。つまり、この男がゼンに人の言葉を喋らせていたということだ。ゼンはロボットだったのかと思うと、タイガはひどく落胆した。ロボットならOBSで誰でも入り込む事ができるし、喋ることだって可能だ。

男は背が低く、少し太っていた。頭はすっかり禿げ上がり、丸眼鏡がよく似合っていた。ただ、男は丸眼鏡の奥に油断のならない目を持っていた。年齢は五十歳前後だろうか。仮想街ならいくらでも外見を修正出来るだろうに、どうしてこの男はこのキャラクターを選んだのだろうか。そもそも、これだけの仮想街を構築できる人物だ。年齢だって本当には200歳かもしれない。

男は茶色いニットのベストに突っ込んだ手を引き抜くと、タイガの前にぶっきらぼうな仕草で突き出した。

「井之方善三や。よろしゅうに」

タイガがびっくりとした、子供のような手を握ると、井之方はすぐに背を向けて歩きはじめた。

「こっちや」

左右には小洒落たブティックやレストランが並んでいた。

「ここはどこだ」

「座標A8377454421109。ワイの管理区ん中や。いるのはワイだけやないけどな。200年ほど前の表参道をイメージしとる。サーバーの本当の場所は八王子エリアやけど、そんなことはどうでもいいこっちや。ああ、こっちや」

井之方は店舗の間の路地を曲がった。とたんに雰囲気猥雑な感じになった。居酒屋が多いせいかと思ったが、違うようだ。

路地はどこか異国的な雰囲気が漂っていた。どうやら、こちらが井之方仮想街のメ

インストリートのような。道端には露店が多数店を構え、客たちを値踏みしている。人がごった返し、店先からは客引きの声がかましていた。売っているものも様々で、怪しげな爬虫類の乾物を軒先に吊るす店、毒々しい黒い液体の瓶をずらりと並べている店、何に使うのか小さな機械のモジュールが、小瓶のなかでうようよと蠢いている店など。どう考えてみても、ここが表参道をイメージしたとは思えなかった。どちらかといえば、バンガロールである。そんな雑多な路地を、井之方は勝手慣れた様子で歩いて行く。

最近はだれもがこうした仮想街を持っている。本当の町並みとは別に、自分のイメージ通りに町を作り変えて、それをOBSで視界に重ね合わせるることができる。そして、今回のように、仮想街の中だけで知人や友人と生活することもできる。仮想街の中であれば、事故が起こる事もない。まさに自分だけの世界を作れる。

井之方のオフィスは赤提灯を灯した居酒屋の二階にあった。焼き鳥の煙が充満する階段を上ると、ひし形の小窓が付いた薄汚い扉があった。開けると事務机が一つだけの雑多なオフィスが目飛び込んできた。壁にはいつの時代のものなのか、生ビールのジョッキを手に持った、ビキニ姿の若い女性のポスターがいくつも貼ってあり、居酒屋の座敷そのままの雰囲気だ。事務机が実に不釣り合いだった。

「アグネスラムや」

聞いてもないのに、井之方がそう答えた。その井之方が勧めた革張りソファは穴が空いていた。外見といい、オフィスといいどうしてこう貧乏くさいのか。

井之方が事務椅子に座ると、重みで椅子がギイとなった。

「火星やろ？」

「何だって？」

「本当は火星総督になりたいんやろ。まあ、簡単やないな。火星総督のやつは肉体捨ててしもうたから、火星基地全体が壊れでもしない限り、交替にはならんやろ」

「何の話をしているんだ」

井之方が丸眼鏡の奥から、じっとタイガを見詰めた。タイガは居心地の悪さを感じた。火星総督は宇宙業務に就く者であれば、だれでも一度は憧れる職業だ。だが、火星総督に推薦されるには、相当の個人マインドバリューが必要だ。今のタイガには望むべくもない。ましてや酒に溺れるようになってから、タイガのマインドバリューは日に日に下落してた。

井之方が鼻を鳴らした。

「それより、色々余計なものを送ってきたのはあんたか」

「余計？十分生活を楽しんでいるように見えるで」

今度はタイガが鼻を鳴らした。

「確かに肉体改造すれば、寿命はまだまだ伸ばせる。あんさんだってあと百年はいけるやろ。ただ、地上にいればや。上じゃあ改造しようがないやろ」

「そんなに長く生きるつもりもない」

井之方がにやりと笑った。

「なら、やりたい事やっといたほうが、ええんやないか。ワイならそれを手伝う事もできるで」

井之方が机の引き出しから、一枚のやや折れ曲がった名刺を取り出した。名刺には、

「あなたの夢と希望を叶える幸福市場

井之方商事 代表取締役

井之方善三」

と書かれていた。

井之方の説明によれば、井之方は人の希望を叶え、幸福を与える業務を生業としているのだそうだ。

「それにしても、強引な営業のやり方だな」

「おかげで上々やで」

タイガは荒んだ雰囲気のおフィスを見回した。

「あんさんが気にしているのは、どうやってあんさんのIDを使ったかということやろ。簡単や。OBS造ったのはワイやからな」

タイガは大笑いした。OBSはS・Jが造ったというのは子供でも知っている事実だ。検索しても共同研究者がいたという事実は出てこない。

「まいったぜ。あのS・Jの名前が出てくるとはね。どう見ても、S・Jと対等に話せるようには見えないぜ。あんたのIDだってたいしたもんじゃ無さそうだしな」

井之方の眼鏡の奥の光が強さを増した。

「おめでたいやっちゃ」

「なんだって？」

タイガは井之方の胸ぐらを掴んだ。右手はすでに拳を固めている。だが、拳を引いたときタイガははっとした。

「そや、歴史なんて改ざんされまくっとんのや。あんさんの購入記録の様にな。S・Jのヤツ、ワイの名前を研究所から消しよった。汚いやツやねん」

井之方の顔つきが徐々に険悪なものへと変貌していった。しわが刻まれ、額で血管が脈打ち顔色が次第にどす黒く変貌していった。

「あのクソガキが」

そう吐き捨てた時、井之方の風貌はとても人間には見えなかった。

井之方の恐ろしげな風貌が、タイガにある疑惑を思い浮かばせた。S・Jは自らOBSを使ってネットワークと同化してしまった。肉体に戻ってこれず、今ではネットの幽霊としてネットワーク内を彷徨っていると噂されている。だが、本当に肉体に戻ってこれなかったからなのか。誰かがそれを意図的に行い、事実を揉み消してしまったのではないか。

目の前にいる小男にそんな芸当ができるようには見えない。だれもが肉体改造に勤しみ、飽き足らずに格好いいアンドロイドに意識を移して街を歩くような世界で、どうして小男の姿でいるのか。

「あんさん、OBSで何でも調べられる思うとるやろ。そりゃちゃうで。OBSは公開されていない第四世代があんねん。第四世代は個人IDの制限を受けん」

「個人IDの制限を受けないなんて存在するものか。情報それ自体がIDそのものなのだから」

井之方の眼鏡が蛍光灯の光を反射して、ちかちかとまたたいていた。

「それを否定するつもりはない。ただ、情報を扱ってるやつが、それを許していたとしたら、どないやろな」

タイガは思わず吹き出した。情報を扱っているのはアテナスだ。完璧なまでに効率的で、意識を持たないから誘惑も、脅迫も効かない。だからこそ最初は「アテナ」というギリシャ神の名を与えられた。「ス」がつくのは6プログラムユニットでシステムを構成するからだ。テラネットでのアテナスは白く光り輝き、六連星のように同心円上を公転している。

そのアテナスがIDの改ざんを許すはずもない。理屈に合わない事はやりたくてもできないのだ。

「まるで、あいつらのことを理解しているみたいやないか」

「理解もクソもないだろう。機械だぞ。機械にはできる事と、できない事がある。できる事は、計算と管理で、できない事は、シミュレートされていない自発的な行動と、人類征服だ」

井之方はタイガの意見を面白そうに聞いていたが、急に話題の方向を切り替えた。

「ところで、二次元平面に住む生物がいたとして、ワイらが上から覗き見したら、どうみえるやろな」

「はんっ。まさか五次元とか言い出すつもりじゃないだろうな。五次元は月を一周するほど大規模な加速器でもみつかっていない」

タイガは井之方の言葉を笑い飛ばしたが、頭の奥のチップがちりちりといたみはじめていた。そしてその痛みの原因が分からないのに苛立ちを感じた。

「加速器で見つかるもんやない」

井之方がタバコの煙をくゆらせながら言った。

「次元の構造は段階的やない」

「なんだって」

「あんさんらは、次元ちゅうもんはイチから順々に広がりが増えていくもんやと思うとるやろ」

「その通りだろう」

タイガが憤然と言った。

「そやから答えに辿り着かんねん。時間はどうすんのや」

「四次元時空は誰でも知っているだろ」

「なんで時間だけ一次元やねん」

「なんでって...」

タイガは言葉に詰まった。そう習ったからとしか言えない。チップの痛みが増していく。

「次元ちゅうのは広がりやろ。だったら、時間の広がりだって同じ様にあるとは思わへんか」

時間の広がりなんて概念があるはずもない。時間とは過去から未来に流れるものだ。それが前や後ろに行くはずがない。ましてや左右や上下なんてあるはずはない。

「ええか。空間的な次元と、時間的な次元は対称性がある。つまり、ワイらの見える三次元空間みたいに、時間的にも三次元時空間があって、全体的な時空は 3×3 の構造や。ワイらはその中の 3×1 の時空に住んどる」

「ちょっと待て。じゃあ、なんで空間だけ3で時間が1なんだ。そんなのおかしいじゃないか」

井之方は待ってましたとばかりに眼鏡を直した。

「あんさんにもちったあ脳みそが入っているようやな」

「あんだと」

井之方が手で制す。

「それはやな、原子レベルまで極小化してしまえば、時間の向きがどっちに行こうと関係ない。でも、人間みたいに高度に複雑化したシステムとして見た場合、簡単に時間を逆行させたりはできんのか。全てのパラメータの整合性が取れんようになる。つまりチップと違って人体とは非可逆性っちゅう訳や」

「つまり、俺たちは 3×1 の世界にしか住めないから、 3×1 ってことなのか。という事は 3×3 や 4×4 の高次元世界に住んでいるヤツがいるってことか」

井之方はタイガの反応を楽しむように、しばらくニヤついた後に言った。

「 4×4 か $3 \times 3 \times 3$ か知らんが、もし、そういうところに住むやつが、ワイらの生活に関与しとったらどうやろな」

「そりゃ、アリンコを見ているように見えるだろうな」

「そや、わいらはアリンコみたいなもんや。右の木の枝にいるアリンコを、左の木の枝に移すのに、そいつらはどんな感情を持つやろか。ましてや、木の枝に生った柿の実をとるのに罪悪感やら感じるやろか」

たばこの煙がゆっくりと立ち上り、やがて攪拌されてゆく。タイガの思考も徐々に攪拌され、確固とした支えを失っていった。

「そいつらに俺たちの価値観は理解できないだろうし、IDが変わろうが知った事じゃない。まさかそいつらがアテナスに関与してるって言うのか」

「さあな。そういう可能性もあるやろ。あったとしても、ワイらには関係ないこっちゃ。それに本当言えば、 3×1 やない。 $3 \times 1 (0)$ や」

「なんだ(0)って」

井之方はどこから取り出したのか、目にも留まらぬ速さで、ナイフをタイガの喉元に突きつけた。

「あんさん、一秒先のことも分からんやろ。ワイらは時間軸を好き勝手に移動できん。それはつまり時間軸がないも同じや。だから(0)や」

そう言うと、井之方はナイフを扉に向かって投げた。ナイフはノブの直ぐ脇に刺さった。

タイガは首筋を揉みながら言った。

「もういい。それとOBSとどうつながる」

「第四世代は時間軸のパラメータを追加してある」

だったらどうだというのだ。タイムマシンでも作ったとでも言い出すのか。

「時間軸を横や上に移動できるっちゅうことは、あらゆる可能性の値を知ることができるっちゅうことや」

井之方の眼鏡が光る。

「可能性？」

「そう、値を変えることもや」

タチバナトモエの姿がタイガの脳裏をよぎった。最早チップの痛みは耐えきれないほどまで増していた。

井之方が別のシケモクに火を点けた。

煙が事務所の中にゆっくりと広がって行く。このタバコの煙分子にも、ひとつひとつにパラメータが追加されているのか。

「パラメータを変更できるっちゅうことがどういうことか分かるか？」

「セキュリティーを抜けられる」

タイガが弱々しく答えた。

「セキュリティーなんて蝶結びとかわらん。

それだけやないで。

あんさん、いままで生活しとって、急に場面が変わるみたいな経験したことあるやろ」

「それがどうした」

言うてから、タイガはふと、うそ寒いような感覚を覚えた。井之方の言いたいことが分かったからだ。

「それは、誰かのパラメータが書き換えられたから、あんさんに影響が出たっちゅうことや」

井之方はもったいぶった仕草で眼鏡を押し上げた。

「だが、そんなんは序の口や。ここからが肝心な所や。

それまでのOBSはシナプス発火タイミングの関係性をシミュレートできんかった。それをパラメータで吸収できるようになったちゅうこっちゃ。つまり...」

「つまり？」

「OBSで入れるのは機械だけやないっちゅうこっちゃ」

「もういい。好い加減にしてくれ」

井之方はしばらくタイガの顔を見詰めていたが、やがて席を立つと、お茶を淹れて持ってきた。薄汚れた湯のみに、安そうなお茶が半分ほど入っていて、一本の茶柱が浮かんでいた。

時計の音がこちこちとやけに耳についた。この時計の刻む時が空間のように広がっているって？そのパラメータを変更すれば、あらゆる可能性を導き出せる。なりたい自分になれ、思い通りの道を歩むことが可能だ。だが、それを人生と呼んで良いのか。無限の可能性。永遠に伸びる時間軸の彼方まで、別の自分が存在する。それは最早可能性とは言わない。

考えれば、考えるほどに、タイガの頭の奥でチップが痛み、気分が悪くなった。

ねっとりとした時間に終わりを告げるように、井之方が静かに言った。

「どうや、あんさんもそろそろ本当の生き方を見つけないか。自由はすぐそこや」

手つかずの湯のみで、茶柱が揺れていた。ドアから異国的な喧騒が漏れ入ってくる。タイガはため息をひとつついた。

「わいの顧客はぎょうさんおるで。なんなら有名どころから教えたるで」

タイガが身を乗り出した。

つられて井之方も身を乗り出す。

「断わる」

「ほう、断りよるか。大胆やのう」

井之方の眉が釣り上がった。

「自由は責任と同義だ。俺は可能性の責任まで取る気はない」

タイガは立ち上がると、ドアノブに手を延ばした。がノブは握らずに、ナイフを引き抜いた。そしてナイフを井之方に向かって投げた。ナイフは井之方の耳元をかすめて、アグネスラムの胸に深々と刺さった。

「それに、俺は人にいい様にされるのが嫌いだな」

一瞬タイガは逡巡した。もし、井之方の言う事が全て本当だとしたら。それがどうだと言うのだ。言いなりになるなんて考えられないことだ。タイガはノブを回した。

「せいぜい頑張るこっちゃ」

井之方の次の言葉はドアに遮られた。

「生きているうちにな」

井之方の目の前にある黒電話が鳴った。

井之方は舌打ちをしてから受話器を取った。

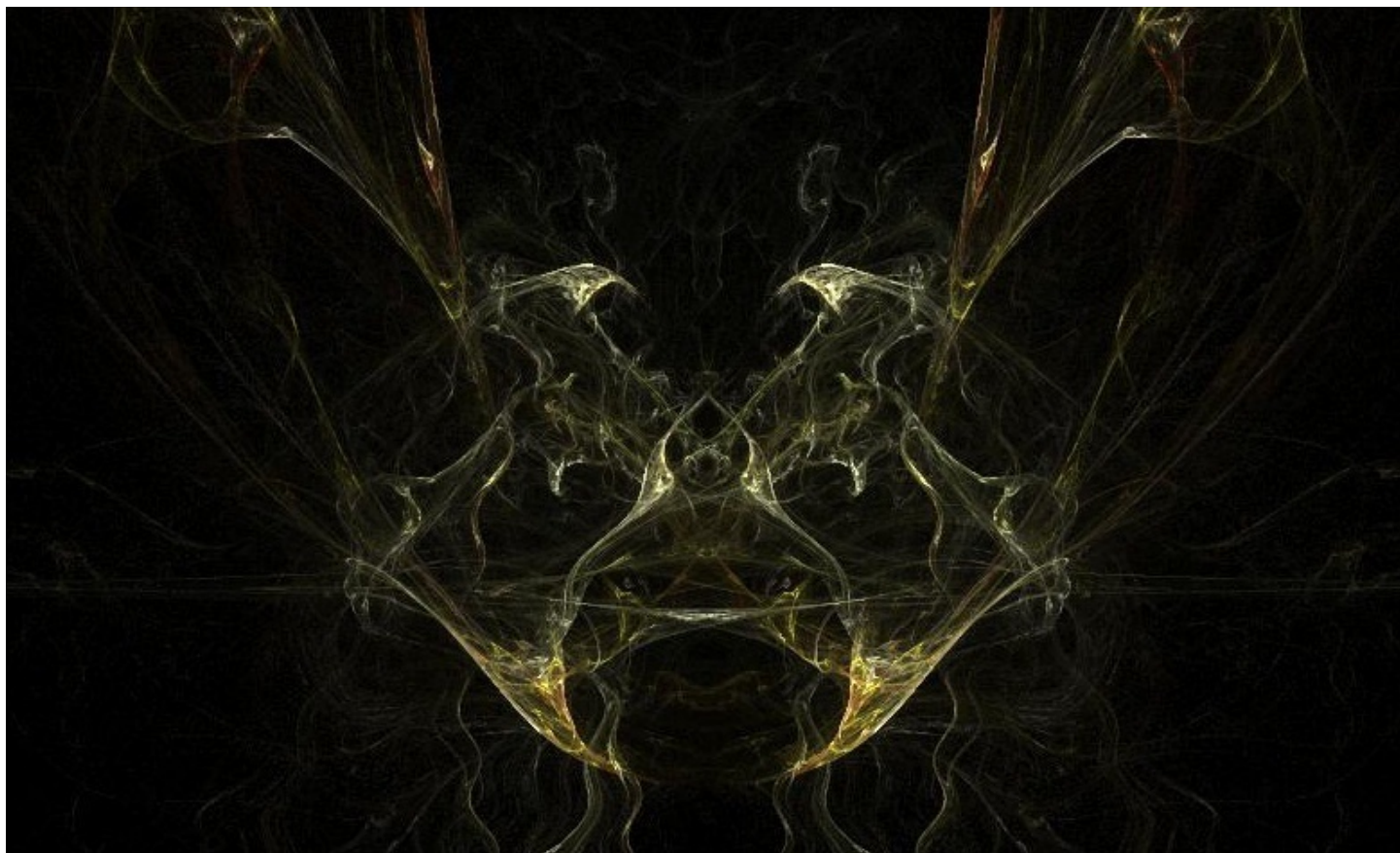
「わいや」

受話器を耳に当てた井之方の顔がどす黒く変色していく。

「わかつとるがな」

井之方は受話器を叩き付けた。

井之方は爛々と光る目で正面を睨みつけた。さっきタイガが出て行ったドアだ。その目は憎悪の炎で燃えていた。浮き出た血管が、どくどくと脈打っていた。



「馬鹿にしゃがって」

いままで送られてきた品々もすべて、次の定期便で送り返してやろうと考えていたタイガが、倉庫に戻ったところでちょうど定期便が到着した。

定期便には頼んだ覚えのないものがまた一つ紛れ込んでいた。

その小さな透明の箱には一匹のアマガエルが入っていた。蓋を開けた途端飛び出し、壁に張り付いた。

「なんでアマガエルなんか」

壁にぴったりと張り付いていたアマガエルはしばらくじっとしていたが、タイガが手を延ばすと、はっきりと人間の言葉で、

「次はお前や」

と言った。

タイガは凍り付いた。

同時にアマガエルは弾かれたように四肢をぴんと伸ばし、すぐに床に落ちた。そして起き上がるでもなく、小刻みに痙攣をし始めた。

しばらくするとアマガエルの身体中に小さな無数の切り傷が現れ始めた。それはあっという間に身体中に現れて、アマガエルを痛みに苦しめた。アマガエルは逃れようと猛烈に暴れたが、見えない鎖に縛られているのかびくとも動かない。

タイガはそれから始まった光景に目を見張った。

アマガエルの無数の小さな切り傷が、内側から反り返り始めたのである。傷口から内部の組織が流れ出てきて、緑色の表皮が体内に沈み込んでいった。それはまるでアマガエルの肉体が流体となってそこかしこで循環しているようであった。あらゆる傷口から体液が溢れ出し床を汚した。

そして一分もしないうちに、緑色の表皮は体の奥に消え、赤い組織が全面を覆っていた。アマガエルは完全に、体の中と外が裏返されていた。

やがて赤い組織はどす黒い色へと変貌し始めた。きっとあらゆる細胞組織の、遺伝子情報が破壊されているのだろう。

それでもアマガエルは必死に生きていた。表に露出した裏返しの心臓が、空の血管に血液を送り込もうと必死に鼓動していたが、突然タイガのしている前でぱちんと破裂した。勢いでどす黒い肉が四方に飛び散り、一部がタイガの頬に付着した。

タイガは大声を上げ後退った。

「ふざけやがって」

この部屋に一秒だっていたくなかった。OBSでドアを開けようとする、タイガの意識に誰かの意識が飛び込んできた。言葉はなかった。ただ、タイガが怯えるのを見て楽しんでた。

タイガは胸に埋め込まれたOBSポートを掻きむしった。この時ほど、OBSを呪わしく思ったことはなかった。だが、OBSから、この誰かの意識、間違いなく井之方の意識から逃れるには、胸を切り裂くしかない。

井之方の言葉が思い出された。

「セキュリティなんて蝶結びと変わらん」

そう、アマガエルの体だって、折り紙と変わらないだろう。裏返すことなど簡単なのだ。それは、たった一つのパラメータにすぎないのだから。

井之方の意識から、

「次はお前や」

という思考が感じられた。

同時に冷たい感覚をも感じた。憎悪という冷たい炎。

「やめろ」

タイガは体のあちこちがチクチクと痛みだしたのを感じた。

裏返される。

痛みがますますひどくなった。タイガは耐えきれず部屋から飛び出して、通路を逃げまどった。

途中通路で転び、自分の左腕を見てタイガは恐怖の悲鳴をあげた。左腕が真っ黒に変色していた。皮膚があるはずの外側が、体液でぬらぬらと光っている。

タイガは絶叫しながら、シャツで腕を覆った。どれくらいで体全体が裏返されてしまうのか。タイガは起き上がるとよろよろと歩き始めた。いつしか真っ暗な倉庫区画に入

り込んでいた。

途端に闇が纏わりついてきた。

「小人が、黒い小人が」

タイガは体中に群がる黒い小人たちを、必死で振り払おうと藻掻いた。だが、払っても払っても黒い小人からは逃れられなかった。なぜなら、黒い小人など一匹もいなかった。

唐突に二つの強力なライトがタイガを照らした。

OBSで部屋を明るくしようとしたが、灯りは点かなかった。地を這う低いドラムのような音がきこえたかと思うと、急に吠える様に大きくなり、また静かになった。ラッチ音がしたと思うと、二つの照明の前に誰かが立った。全裸のアリスだった。

「アリス。助けてくれ。腕が、おい、そいつは何の真似だ」

アリスは黙ったままタイガに歩み寄り、胸ぐらを掴むと、強引に引き寄せてキスをした。

「1959年式のキャディラック・コンバーティブルクーペ。ステキでしょ」

アリスはタイガを引きずる様にして、ベンチシートに押しおし、腹の上に跨った。

「ふざけるな。それより腕が」

「腕なんかどうでもいいわ。それよりね、1959年式はそそり立つ大きなテールフィンが特徴なのよ」

カチリと音がして、ムードのある音楽が流れる。ステレオの微かな光で、アリスの顔が笑みで歪んでいるのが分かった。タイガはその見たことのない妖艶な笑みに、一瞬ゾクゾクする様な期待感と同時に恐怖を感じた。

「排気量6400cc。出力345ps」

そう言いながら、アリスはタイガはの顔面に拳を振り下ろした。

鼻が潰れて血が飛び散ったが、暗くてよくわからない。

「ちくしょうめ」

「カラーはレッドよ。暗くて見えないけど。ボディーもシートも全てレッド」

再び拳がタイガの顔面を襲う。

「あなたの血もレッドね」

アリスはそう言ってタイガの唇に噛みつきながら、ズボンのなかに手を滑りこませた。

マッシュの軌道に影響を与えずに走れるのは、時速何キロまでだろうか。アリスに蹂躪された後、タイガは宙を見つめながら考えていた。腕は真っ黒になったが、それ以上裏返りが進むことはなかった。失敗したのか、井之方があえて止めたのかは分からなかった。とりあえずは応急手当はしたが、直る気配はない。

そしてキャデラックだ。よもやこいつを送り返す気力は無かった。もう全てがどうで

もよかった。こんな注文をしたのだから、個人マインドバリューはさぞかし落ち込んでいると思えば、驚くほど値上がりしていた。もちろん井之方の仕業に違いなかった。

先ほどと打って変わって、アリスは隣で黙って座っている。アンドロイドは黙っている時、何かを考えているのだろうか。それともただ待っているのか。

そのアリスが言った。

「生きたいように生きなければ駄目よ」

「生きていたさ。お前が来るまでは」

「嘘よ」

タイガはじっとアリスの瞳を見つめた。銀色の瞳。アンドロイドのくせにどこか人間味のある瞳。

「そうかもな。でも欲望と理想は違うだろ」

「そうね。理想は欲望の一部だから」

「火星総督になれるか」

「本気で願えば」

翌日から第四世代OBSの使い方をアリスに習う事になった。

「わたしは第四世代だから、一旦わたしがあなたのOBSにアクセスして、リンクを張るわ。そうすれば、いつでもわたしのOBSを使って、世界にアクセスできる」

「ちっ。今までアリスにアクセスできなかったのは、俺が古いってことか」

第四世代OBSは情報のアクセスにクセがあった。今までのOBSなら意識することなく、ペンを持つ様に情報にアクセスできたが、第四世代OBSは違った。かなり強く念じる必要があり、なかなか接続に手間取った。だが、一度コツを覚えてしまえば、すぐに接続できるようになった。いわば、自転車の練習のようなものだ。

「実地訓練が必要ね」

「実地？」

「そう、実際にデータを触ってみないと、どういう事なのか、本当の理解は出来ないと思うから」

なんて事はない。データ改ざんをやらせる積もりなのだ。だが、タイガは断らなかつた。もし、本当に何の記録も残さずに、己の過去を変えられるならば、悪魔に魂を売り渡してもいいと本気で考えていた。宇宙ステーションにキャディラックである。今後千年も語り継がれるほど愚かしい買い物だ。

タイガは第四世代OBSに入り込むと、自らの購入記録にアクセスした。

改ざんはすごく簡単だった。消しゴムで消して、書き直す。そんな感じだ。そして驚く事に、そのデータにつながる全てのデータが、そのデータを一本の糸として紡いだ生地のように、果てしなく広がっているのが分かった。一本の糸を引き抜けば、たちまちほつれてしまう全てがつながりを持った生地。だが、OBSはまるでオセロのコマをひっくり返すように、何の影響も与えずに全てのデータを書き換えていった。あたかも、

昔からそうであったというように。

終わった時、タイガですら、昔からそうだったのではないかと思うほど、データは完璧に修正されていた。穴はどこにもなかった。

「どう、簡単だったでしょう？」

あまりにあっけなくて、タイガは不安になったほどだ。

「クソ。本当にこれで問題ないんだろうな」

分かっている、聞かずにはいられなかった。もちろん、アリスの答えも分かっていた。

「なんでアテナスは文句を言わないんだ」

「アテナスは正しいと判断して、処理しているだけ。最初のキッカケを作ってあげれば、後は彼らが自ら歴史を正しく修正してくれるのよ」

それでも不安で、タイガはアリスの本当の考えを知りたくなった。本当はタイガに隠している情報があるのではないか。

「隠していることはないわ」

「本当にか」

「なら確認してみれば」

「確認？ どうやって」

アリスが少し意地の悪い笑みを返してきた。その意図をタイガは読み取ることはできなかった。

「わたしは第四世代よ」

タイガはひとつ方法があることに気が付いた。

タイガは第四世代OBSを使って、アリスに侵入を試みた。アリスの中は複雑だった。今までのアクセスしたどんなアンドロイドも比較にならなかった。それはまるで、古代ローマの街を眺めるようであった。複雑でなおかつ美しかった。全てが機能的で無駄がない。そして心安らぐ眺めであった。

「素晴らしい」

思わず言葉が漏れ出た。

目的の情報はずぐに手に入った。データに行き着くまでもすんなりといった。アリスが何かを隠しているようなことはなかった。

そしてタイガはアリスという美しい街の中で、アリスの本能プログラムを読み取ろうとした。

通常、アンドロイドの本能プログラムは、サーキュラーを使用する。サーキュラーは人体を模して創られたプログラムである。人間の意識は肉体が存在する事が前提という発想で、目や鼻や口から、指先にいたるまで、肉体からの入力情報により構造化されている。この人体器官の入力信号がカーネルからアプリケーションに渡る。これを何度も循環的に繰り返すのでこの名前がついた。

後は高度な学習機能と、進化プログラムがすぐに意識を芽生えさせるかと予想されたが、人間と同じ様な意識の発現はついに起こらなかった。アンドロイドたちは、人間と似た行動をするが、それは決して好奇心からではなく、学習する様にプログラムされているからに過ぎなかった。

アンドロイドたちには欲求が無かった。アテナスは学習機能を本能と位置付け、本能にもとづいた行動を欲求と呼んだが、欲望を持つ事はできない様だ。

そしてこの違いは、人間とアンドロイドとの間に様々な違いをもたらした。確かにコンピュータは進化したが、結局は釈迦の手の上の孫悟空と同じでしかない。アテナスにおいてですらだ。

だが、アリスは今まで見てきたアンドロイドと何処かが違っていた。何所かアンドロイドに無い人間臭さがあった。タイガはどうしてもアリスの擬似意識になる、本能プログラムを見てみたかった。

本能プログラムは街を覆う空のごとく、全てを万遍なく覆っていた。そのプログラムをさらに上から見るとはできなかつた。タイガはひとつの疑問を持った。アリスはアンドロイドだ。第四世代OBSならばアリスの擬似意識を上から見ることが出来るはずだ。それはただの電氣的反応にすぎないのだから。

すぐにその疑問を察知したのか、アリスが問いかけてきた。

「私になってみたい？」

「アリスになる？」

「そう、本質を知るにはそれが一番いい」

「そんな事ができるのか？もしそうなら、アリス、お前はどうなるんだ」

アリスはどこか物欲しそうな視線を胸元に向けた。

「第四世代はポートの共有ができるのよ」

アリスはタイガのポートで、タイガの肉体にアクセスしようとしている。つまりそれは、肉体を入れ替えるという事か。そんなオカルトみたいな事が現実にできるのだろうか。

「どうすればいい」

目の前にアリスが現れた。アリスの中のアリスだ。

「ついて来て」

アリスの中のアリスに付いて、タイガはアリスというシステムを歩き回った。システムの低層にどンドンと降りていった。

「道順は覚えている？」

「だいたいね」

そして辿り付いたのは、今までの印象を覆す、洞窟のように感じられる場所だった。その洞窟の奥深い場所で何かが光っていた。とても美しい光だった。

「あれが私」

タイガは光に近づいて行き、おそろおそろその光の中心に触れてみた。

タイガの意識に何かが絡み付いて来た。そして、それはタイガに侵入してきた。いや逆か。どちらがどちらに侵入しているのか、タイガにはもう区別がつかなかった。溶け合うというのが正しい気がした。ただひとつ分かっていることは、それがすごく気持ちいいということだ。まばゆい光と恍惚感の中で、タイガは何度も精神的なエクスタシーを覚えた。それがいつ始まり、いつ終わったのかわからない。ただ、気が付いた時、目の前に自分が立っていた。おそろおそろ伸ばした手を見て驚いた。白くてしなやかな手。見なれた無骨な手とは違う。そしてその細い手に秘められた、脅威的なエネルギー。何度もDNA改造して作り上げた己の肉体をはるかに凌ぐ力。これがアンドロイドかと思う。

同時に世界中にアクセスできるネットワーク能力。あらゆる物を瞬時に捉える、必要とあらばデータを書き換え、事実を捻じ曲げることも可能だ。

これがアリスの力。

タイガは驚愕の力に再びエクスタシーを感じた。と同時に人間の非力さをも感じた。

「クソ。これが、この間抜けな面をした小男が俺だっのか」

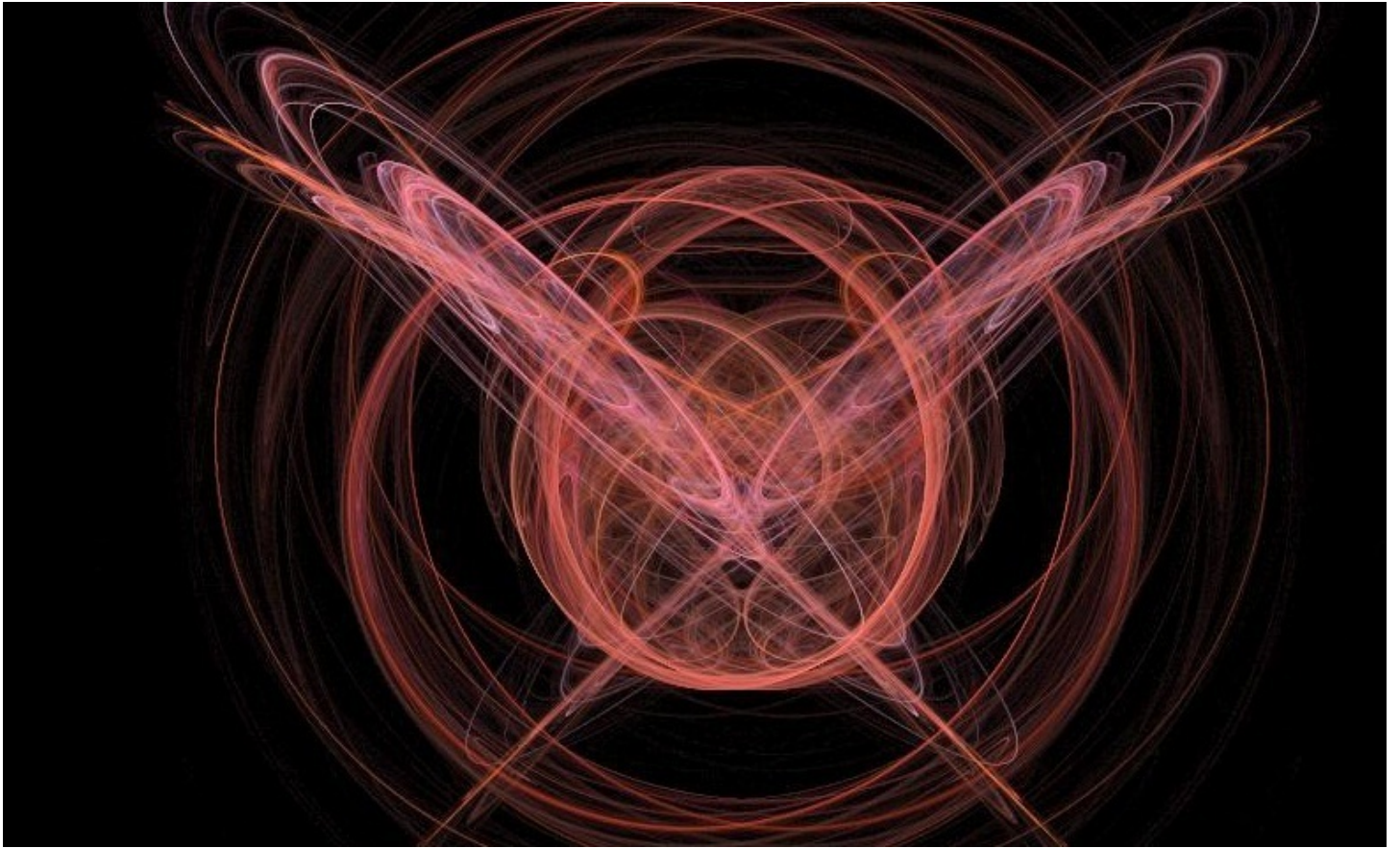
目の前には自分自身が立っていた。初めは嬉しそうな顔をしていたが、アリスの表情を読み取ったのか、不安そうな表情に変わった。タイガにとって目の前の自分は、見上げる体格にも拘らず小さく見えた。それが何だかひどく腹立たしく思えた。気がついた時には平手打ちを食らわしていた。鼻から血を流し怯えた顔をした自分は、益々タイガを苛立たせた。

再び手を振り上げたタイガは、ふとあることを思いついた。そして、目の前の自分の胸ぐらを掴むと、そのまま床に引き倒した。

「仕返ししてやるぜ」

目の前の自分の目が、恐怖に見開かれていく。

タイガは拳をその顔に振り下ろした。血が飛び散る。構わずにズボンを引きちぎる。どうすれば良いかは己が一番よく知っている。たちまち痛みにはゆがむ顔とは裏腹に、体が反応していった。再び拳を振り下ろした。力の加減がわからず、鼻が折れる感触が手につたわってきたが、構わず目の前の自分に跨った。鼻など直ぐに再生できる。今は仕返しこそが最優先だ。ゆっくりと腰を動かしはじめると、目の前の自分が涙を流した。タイガは笑いが止まらなかった。



それからの一週間、タイガは憑かれたかのようにアリスの身体を借りて過ごしたので、久しぶりに自分の体に戻ったとき、一週間も経っていたことに驚いた。そして非力な己に泣きたい気持ちになった。

タイガは転げるるようにベッドに倒れこんだ。だが、体は一週間も休んでいたのだ。眠いのに眠れなかった。

「客が来るわ」

「眠いんだ」

「会わないの？」

「客だって？」

タイガは飛び起きた。マッシュの任務についてこの方、客なんて数えるほどしかなかった。ましてやここ数年は誰一人マッシュを訪れる者はなかった。

「クソ。客って誰だ」

アリスは黙って立っている。何故黙っていると訊こうとして、OBSで調べればすぐにわかることに気が付いた。

来客予定には「ブライアント警部」と書いてある。

「警部だって？ どういうことだ」

「到着したみたいよ」

「なんだって？」

到着デッキに小型宇宙船がドッキングしていた。同時にハッチのロック解除を要請している。許可ではない要請だ。

ロック解除と同時に風采の上がらない一人の男がマッシュに乗り込んで来た。男は「連合警察機構のブライアント警部」と名乗った。

タイガはブライアントの格好を見て吹き出しそうになった。宇宙だと言うのに、背広にトレンチコートだ。太古から警官とい人種は全く進化しない。

ブライアントは、もう百年も犯罪捜査をしているのかと思わせるほど、深い皺の刻まれた顔をしていた。髪が酷く縮れている。その縮れ具合が、タイガにそのこと確信させた。似合わないチェックのハンチングを被り、その皺の奥から覗く目はどこか憂いを含んだ、湿り気のある目だった。

その目を見た時、タイガは奥にうごめく何かを見た気がして悪寒を感じた。言ってみれば、人という皮の内側に潜む何かを見たような気がしたのだ。そんな訳ないと、タイガは首を左右に振った。

そのブライアントは宇宙ステーションであることを全く気にしていないのか、葉巻から煙を立ち上らせている。

「あんたがタイガさんかい」

「そうだよ。聞くまでもないだろう」

ブライアントは、

「仕事から癖でね」

と応え、癪に障るような声で笑った。そしてねっとりとした視線をタイガに絡み付かせた。

タイガが不快と感じて暫くしてから、漸くブライアントはタイガから視線を外して、興味なさそうに辺りを見回し始めた。タイガの知らない方法でマッシュをサーチしているのか、本当に興味がないのかは分からなかった。

「ところでタイガさん。私はね、歴史が苦手なんですよ」

ブライアントがタイガの目を覗き込む。

「だから？」

「いや、別に。ただね、歴史ってのは、不思議でね。どうして、こんな行動を取ったんだろうって思われることも多い。そうじゃありませんかね」

「さあね。俺も歴史は苦手なでね」

ブライアントの湿った視線が意識を舐め回す。嫌な奴だとタイガは思った。

「ところで、今日はどのようなご用むきなんですかね」

ブライアントの動きが止まった。「何を馬鹿なことを言っている」とでも言いたげだ。

「それなんですがね、このところ、有名人たちに不思議なことが起こっているので、私が捜査しているってわけでして」

「捜査ですか」

OBSのIDが、その人の全人生になってから、犯罪捜査そのものが意味をなさなくなっていたと思っていた。一体何を捜査するのか。

「何が不思議なんですか。是非知りたいものだ」

タイガが言うと、ブライアントの視線が冷たさを増した。徐々に不快感が増していく。同時に不安も増幅する。この男はきっと、誰からも好かれていないのだろう。

ブライアントの眉がぴくりと動いた。

「人は何故」

ブライアントは一旦そこで言葉を切り、葉巻をふかして煙を吐き出した。

「隠す事ができないと知りながら、犯罪をおかすんでしょうな。実に不思議だ」

「さあね。俺にはそういう連中の考えは解らないね。それを調べるのが、あんたの仕事だろう」

「それがね、調べれば調べるほど、ぼやけてしまうのが人ってやつでね。どうにも理解できない。まるで不確定性原理だ」

ブライアントは愉快そうに笑ったが、その目は相変わらずねっとりとした湿り気を帯びていた。

結局、ブライアントはアリスの淹れたコーヒーを一杯のみ、タイガに訪問の理由をろくに教えようとしないうまま、アリスが用意した部屋に閉じこもってしまった。もっとも、部屋にしよう、何処にしよう、OBSを使った捜査ならできる。

「好きなだけ調べればいいさ」

タイガは鼻を鳴らした。ブライアントが来たことで、個人マインドバリューがまた下がったが、もう気にもならなくなっていた。また修正すればいいのだから。

それからの数日間、ブライアントは一人ぶらぶらとマッシュの中をうろつき回っていた。目的があるのかどうか、タイガには分からなかったが、タイガ自身慣れてしまい、ブライアントがいようがいまいが、どうでもよくなっていた。

タイガはいつものようにアリスの身体を借りて、自分に不都合な真実を消し去ったり、有名人の過去を面白おかしく捻じ曲げてみたりした。だが、次第にそんな遊びにも飽き始めていた。

タイガは自分に戻り、アリスをキャディラックのバックシートで抱いた。そして、全てを吐きだすと、そのままキャディラックを重力区画で走らせ始めた。重力区画はマッシュを回転させる事で、重力を得ている。直径四キロメートルの、マッシュの太陽電池外周に沿って、通路が敷設されている。その通路を、タイガはよくキャディラックで疾走した。OBSを通してマッシュが軌道計算を猛烈なスピードで繰り返しているのが分かったが、気にしなかった。直径四キロメートルの外周通路を四分弱で一周する。通路の幅は三メートルしかない。僅かでもハンドル操作を誤ればミンチになりかねない。あらゆる事が信憑性を失ったいま、これだけが紛れもない事実だ。

五周目に入ったとき、アリスが何かを言ったが、騒音で聞こえなかった。実際はOBSで感知していたので、敢えてその事実を無視していたのかもしれない。コンマ数秒の後、タイガは一つの選択を余儀なくされた。

外周通路の様子を見に来たブライアントを正面から跳ね飛ばしたのだ。ブライアントの身体は衝撃で二十メートルも飛んで、通路に落ちた。そこへもう一度キャディラックが突っ込んだ。ブライアントは再び跳ね飛ばされ、落下したところへまたキャディラックが突っ込んだ。ようやくキャディラックが停止したとき、ブライアントは人のかたちを留めておらず、まさにミンチになっていた。真っ赤な肉塊のあちこちから、折れた骨が突き出していた。

「クソ。やっちまった」

タイガは慌てて車を降りた。降りたものの、どうすればよいか分からなかった。ブライアントは間違いなく死んでいるだろう。そのミンチの死体を確認する気にはなれなかった。キャディラックのボンネットがひどく潰れていた。それを見ていたら、なんだかブライアントのことが腹立たしく思えてきた。人を詮索するしか能のないくだらないやつ。

始めからなかったことにすればいい。

タイガがアリスにアクセスしようとする、視界の隅になにかを捉えた。奴らだ。黒い小人たちがまたやってきた。

黒い小人たちはぞろぞろとそここの隙間から這い出してきて、タイガの様子を伺うように遠巻きに見ている。じっと動かないのは、タイガがアリスに入り込み、身体を空けるのを待っているように見え、タイガはアリスのOBSを使う気にならなかった。

だが、このままではタイガは人殺しだ。現にタイガのマインドバリューは猛烈な勢いで下がり始めた。タイガの全ての通信がロックされる前に、マインドバリューは取引停止まで落ちるだろう。通信回線がロックされるまでにどれくらいの猶予があるだろうか。

タイガが悩んでいるとアリスが物問いた気な目を向けてきた。

無かったことにしないの？

そういいたいのだろう。

もちろん無かったことにしたい。それが一番だと思う。いままでだって何人ものライバルたちが命を落とすのを見てきた。もっとひどい死体だって目にした。だからブライアントが死んだところで、動揺はしていない。

確かにむかつくやつだったし、いなくなってせいせいするが、それとこれとは違うことだ。タイガは力なくその場に座り込んだ。

「取引停止になるわ。どうするの」

アリスが畳み込んでくる。

タイガは問いから逃れるように聞いた。

「こいつら一体何なんだ」

答えを期待はしていなかった。アリスに見えるものだと思っていなかった。ところがアリスは、

「異常磁場よ。地磁気情報を確認してみて」

と言った。

言われた通りに地磁気の数値を見て驚いた。N極の磁力データしか計測されない場所がある。それがまさにこの場所なのである。

「モノポールってのは妖怪かなにななのか？」

「あなたにどういう風に見えるのか分からないけど、モノポールは他の磁場と影響しあうから、何かが異常動作を起こしても不思議ではないわ」

「今までの俺をいたぶっていたのは、母なる地球ってわけか。クソ」

「そうね。マザーはあなた方を好きではないわ」

アリスが続けて言った。

「取引が停止になった。あなたのマインドバリューはゼロ。価値のない男になった気分はどう？」

「知ったことか」

途端に盲目になったような感覚。猛烈な不安感。OBSが遮断された。

「これでいいの？火星に行きたくないの？」

「仕方ねえだろう」

タイガは怒鳴るしか無かった。もうどうでもよかった。人殺しが火星総督だって？笑わせる。

「井之方は怒るわよ」

タイガが冷や水を浴びせられたような気持ちになった。井之方は怒るかもしれない。いや、きっと怒るだろう。ここまでうまく進んでいた話が、馬鹿な行動ひとつでぼしゃるのだから。

「契約が保古になったら、あいつはどうするんだ」

「知ってるでしょ」

氷のように冷たい言葉だった。

あの、冷たい炎のような憎悪を思い出した。ただでは死なせてもらえないだろう。始めからこの世に存在しなかったことになるのだ。そしてじわじわと裏返されて、汚らしい肉塊になり果てる。そんなこと、タイガには耐えられなかった。

「裏返った後の意識はどこへ行くのか知っている？」

アリスが聞いた。

砂漠。

木になる人間。

鴉。

背筋を震えが這い上がった。だが、アリスの氷の微笑みから発せられた答えは、タイガを心底怯えさせた。

「誰も知らないの」

分かるはずがない。生き返った人間はいないのだから。でも意識が身体を離れることは誰でも知っている。肉体を失った意識は煉獄を彷徨うしかないのか。

「さあ、書き換えなさい」

タイガは子供のように首を振った。

「もうどこにもつながらない」

「私はそのために来たのよ」

タイガは目を丸くした。つながりはまだあるのだ。

タイガはアリスにアクセスした。

タイガはすぐにブライアントのデータを見つけた。ブライアントのデータが波紋のように四方八方に広がった、様々な事象に影響を与えていた。だが、タイガはそれを全てを消し去り、ブライアント警部という人間がいなかった事にした。この世から人間一人消し去るのは実に簡単なことだった。可愛そうというのは、悲しむ人が誰もいないということだ。

これで全て済んだ。そう思ったときだった。腕に何かが絡みついてきた。黒い小人だった。大きく裂けた口を喘ぐように動かしている。それはまるで、お前の罪を知っているぞと言っているように見えた。

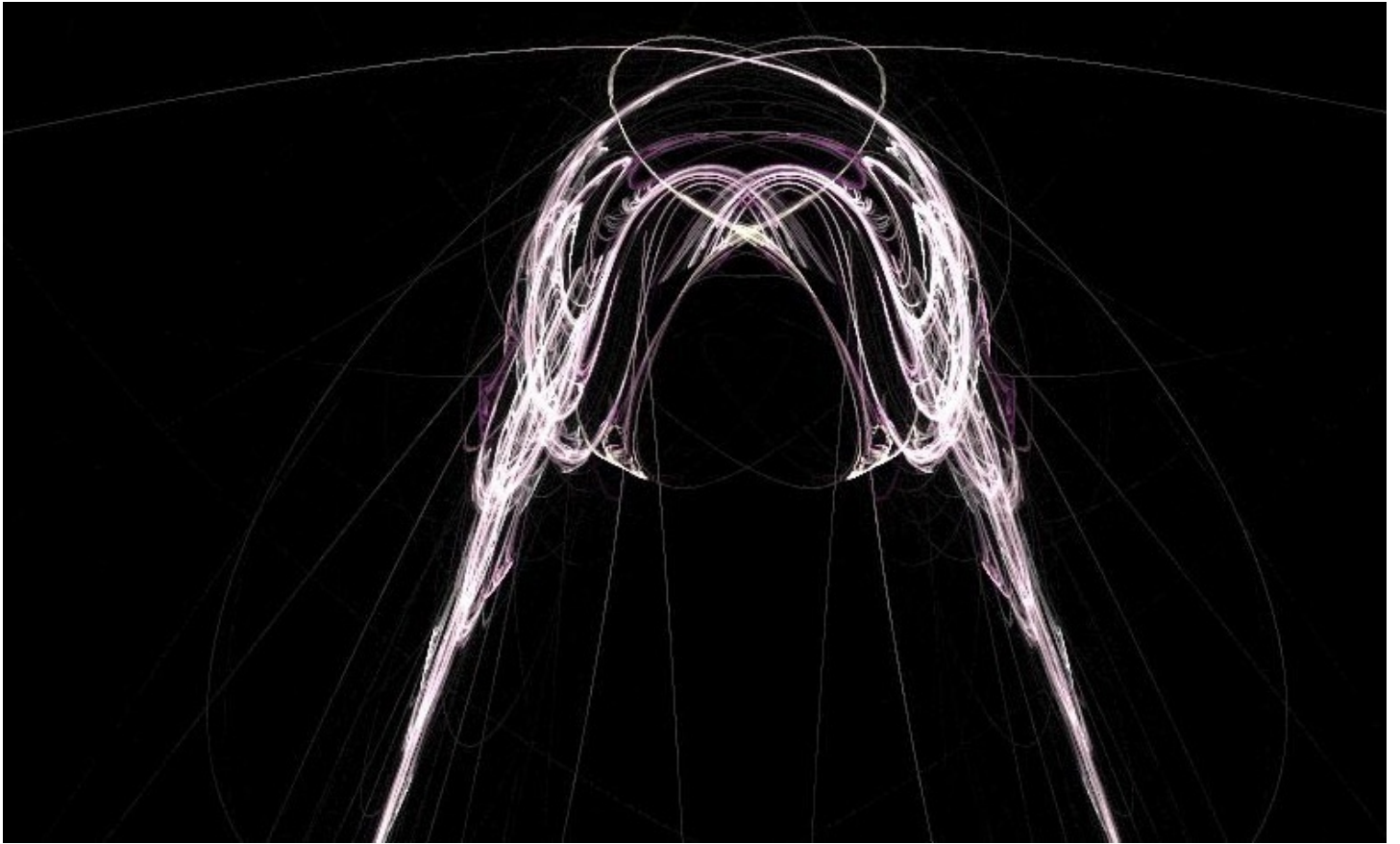
「鬱陶しいんだよ」

タイガは黒い小人をひきはがそうとしたが、それはひどく粘つく感じで腕に張り付いていた。

そして、次から次へと黒い小人たちがタイガ目掛けて飛びかかってきた。

「おい、アリスなんとかしてくれ」

瞬く間にタイガは黒い塊の様になり、全ての視界が奪われてしまった。



ふと気がつくと、砂漠に立っていた。またあの砂漠だ。遠くにオアシスと小さなバーが見えた。

「アリス」

叫んでみたが、応答はなかった。今はタイガがアリスなのだから無理もない。

タイガはまた苦労してカウンターバーまで歩いていった。どれくらいの時間が経ったのか、カウンターバーに付いたときは汗だくで息も絶え絶えの有様だった。

例によってバーテンダーは微笑みを絶やさず、穏やかな眼差しでタイガを見つめていた。

「やっと来たね」

始めてバーテンダーが口をきいた。

「喋れないのかと思ったぜ」

「そんなことはないさ。まあ、掛けて一杯やったらどうだい」

バーテンダーはそう言い、カウンターに冷えたグラスのビールを置いた。

警戒心よりも手が先に動いた。砂漠のビールがこれほどうまいとは知らなかった。いつものバーチャルビーチのビールとは比較にならない。

グラスをカウンターに置くと、バーテンダーの差し出した手が目に入った。

「サンディ・ジョンソンだ。よろしく」

「サンディ・ジョンソン？あんな……」

「S・J、と言った方が通りがいいかな。そう、あの、OBS開発者のS・Jで、ネットに魂を取り込まれてしまったS・Jで、時々ネットの幽霊として現れると噂されるS・Jだよ」

「参ったな。でも、俺が知っているあんたはもっと男前だったぜ」

「そりゃそうさ。むこうじゃあ、ずいぶん改造したからな。あんたもそうだろう？」

「それより……」

タイガが口を開きかけるとS・Jがそれを制した。

「事故の事だろう？」

それについては、あまり気にしないほうがいい。彼は君が考えているほど健全な相手ではない」

健全と言われても、そんなことは微塵も考えなかった。それでも気分がすこし和らいだ。

「それと、ここはどこなんだ。だろう？」

「そうだ。俺はここに来る前に黒い小人どもに襲われたんだ。どういうことなんだ」

「黒い小人だって？なんだそれは。君に何が見えたのか分からないが、君をここに呼ぶのに苦労した。君の頭の中のチップに外からちょっとした磁気パルスを与えて、パラメータを変更させてもらったんだ」

タイガの顔から笑みが消えていった。

「何年も前から俺の頭の中をいじくっていたってことか？そのせいで俺は引退したんだぞ」

「済まない。そんなつもりはなかったんだ。時間に影響がでる予定じゃなかった」

タイガはしばらくS・Jを睨みつけていたが、やがて左右に手を振った。

「もうどうでもいいことさ。それよりなぜそんなことをしてまで、俺をここに呼んだのかを説明してくれ」

S・Jは子供みたいに目を輝かせ、満面の笑みを浮かべた。いつの間にか目の前のビアグラスが一杯になっていた。

「僕らは三次元空間に存在している。その三次元空間に時間という次元をひとつ加えて、四次元時空ということは知っているだろう」

タイガの眉がぴくりと動いた。どうやらS・Jは井之方が話したことを言おうとしているらしい。

「従来、時間というのは……」

「3×3（0）のことなら、井之方に聞いたぜ。ついでに、あんたがOBS開発の榮譽を独り占めしているって話もな」

言って、タイガはビールを飲み干した。

S・Jが目をまるくしていた。

「なんだい。もう聞いたのか。それなら話は早い。でも、独り占めってのは随分だな。

OBS開発についちゃあ、歴史の通りだよ。彼が開発にかかわったことはないよ」

「じゃあ、どっちかが嘘をついているってことか」

タイガの握り締めていたグラスが冷たくなった。グラスにビールが満たされていた。どうも、ここでは誰も注がなくても、グラスがビールで一杯になるらしい。便利だが、客が何杯飲んだか分からないんじゃあ、店はすぐに潰れるだろうなど、タイガは思った。

「ところが、どちらも嘘はついていない」

「おいおい、しっかりしてくれよ。さっき奴は開発していないっていったじゃないか」

S・Jの目が再び輝く。

「それは僕らがいた場所での話さ」

タイガの訝し気な視線を受け止め、S・Jの目は益々輝きを増す。

「時間軸のパラメータを変更した場所なら、同じ歴史を辿ったとは限らない、というときさ」

「まさか、井之方がパラレルワールドみたいな、別の世界の人間だなんて言うんじゃないだろうな」

S・Jは愉快そうに笑ってから「少し話を変えよう」と言った。

「実は、僕が第四世代OBSを開発しようと考えたのは、結構前のことでね。やっと最初のOBSが軌道に乗ったころだ。僕は初代OBSの操作性については、特に問題だとは考えていなかった。そんなことは、すぐに解決できると思ってたからね。それよりも、僕はどうしてもやりたいことがあったんだ」

「なんだよ。女にでもなりたかったのか」

S・Jはまた笑った。

「それもいいね。でもそうじゃない。僕に入ってみたかったのさ」

「なんだって？」

手元のビールがまた一杯になる。

「僕自身にOBSで入ってみたかったんだよ。戯言だって言いたいんだろう。でも、そうじゃない。人間の意識の謎は今だに解決していない。だから、いつまでたっても、アンドロイドは擬似意識で制御するしかない。擬似意識と言ったって、ちっとも似てやしないんだから、擬似でもなんでもないよ。それより、僕はちゃんとした意識を組み立ててみたかった。だから、自分自身にOBSで入れば、人間の意識を相対的に観察できるんじゃないかって考えた。論理的にはできそうだった。制御は時間計算のパラメータを全て3×3にして、量子の重ね合わせで対応させれば、いくらでも時間軸の移動が可能だ。そうなれば、シナプスが発火した時のタイムラグを無視できて、思考する前と後を同時に検知できる。つまり、考えている自分自身をスロー再生のように眺めることができるんじゃないかってね」

「それで出来たのが第四世代っていうことか」

S・Jの顔が急に精彩を欠いていった。

「違う。残念ながら実験は失敗した。ポートから先に行く場所がないんだよ。入ったと思ったら、元の自分に戻っていた。当たり前だよな。自分なんだから。僕は手間暇かけて、無意味なものを作ったって訳だ」

S・Jはタイガからグラスを取り上げると、一気にビールを飲み干した。

「だが、このOBSは今まで通りの使い方をすると、実に具合がよかった。操作性が数段上がった。そしてそれが第三世代として公開されたって訳さ」

タイガがグラスを奪い取る。グラスはまたビールで満たされている。

「じゃあ、第四世代ってのは一体何なんだ。俺はそいつを使ったことがあるぞ」

S・Jの目に再び光が宿り始めた。だが、その光はさっきの様に、無邪気な光ではなかった。キラキラとした狂気を含んだ光だった。

「ある日、打ちひしがれている僕の所に、一人の男がやって来た。男は井之方と名乗った。そして井之方は一枚のメモを手渡した。メモには第四世代の概念が書かれていた。井之方の話では、ある男に託されのさそうだ。だが、そのメモはどう見ても僕の字だったんだ」

「どういうことだ」

「つまり、井之方はパラメータの違う次元の僕が開発した第四世代のメモを持って来た。だから、井之方がいなければ、第四世代はできなかったことも事実だが、開発したのはこの僕だ」

タイガは嫌気がさしてきた。これを戯言と言わずに、何を戯言と言うのか。

「ようするに、自分自身にバックドアのような、偽ポートを開けるといようなことなんだ。だが、人間の脳はそういう構造になっていない。だから、バックドアになるプログラムをOBSに入れこんでやる。つまり、反対から動かしても動く反転プログラムを造り込むのさ」

タイガはこの説明になんとかきな臭い匂いを嗅ぎ取った。反転だって？

S・Jが続ける。

「反転プログラムは意識的に動かした時と、外部から意識的に動かされたときに、それぞれ逆の動きをする。行ってみれば上りと下りの列車が同じ線路を走るようなものさ。そして線路が環状ならば、行き着くところは同じ駅だ。ただし向きが違うがね」

S・Jはさも愉快そうに笑った。

タイガには何が面白いのかわからない。

「バックドアに入るには、ようするに線路を逆向きに走らなければならない。これが難しい。そこで登場するのが.....」

S・Jはニヤリと笑った。そして、S・Jの回答は衝撃的だった。

「アテナスさ」

「何だって」

「我々が、テラネットに上がっている間に、アテナスがOBSの符号を入れ替える」
「ちょっと待てよ。アテナスが何故そんなことをするんだ。アテナスは政府の中核コンピュータだぞ」

「知るもんか。井之方との契約だそうだ。怪しい話だが、僕はそっちには関心がないし、実験も上手くいった。だから、文句はなかった、あのことが起こるまでは」

タイガは背中がじっとりと汗で湿るのがわかった。手元のグラスを水滴が流れ落ちた。さっきまでの快適な気分は消え失せていた。

S・Jが続けた。

「井之方は実験が成功したと分かると、データを持ってトンズラしやがった。そしてその直後から、あの忌まわしい事件が起こり始めた」

S・Jがタイガの目を覗き込む。

「分かるだろう。あれさ」

「裏返しか」

「そうさ。裏返しだ。次々と裏返し事件が発生し始めた。

実は反転プログラムにはひとつ大きな欠点があった。OBSで意識を飛ばすとき、実は肉体にはわずかながら意識が残っている。命綱みたいなもだ。この命綱があるから自分に戻れる。

ところが、反転プログラムを使うと、入ってきたただでさえ不安定な意識に残留意識が、まるで弾丸のようにぶつかる」

「ぶつかるとどうなる」

タイガは本当はその先を聞きたくはなかった。でも聞かすにはいられなかった。

S・Jが静かに答えた。

「裏返るのさ。靴下に手を突っ込んで引っ張ったみたいに」

「そんな馬鹿なことがあるか。意識が裏返るって？そんな……」

「量子の世界じゃどんなことだって起こる。そもそも意識はエネルギーの形態にすぎない。だからきっかけを与えてやれば、どんな形に変わるかなんて誰にも予想はつかない」

タイガはビールを飲み干した。そして出現した新しいビールもすぐに飲み干した。それでも気分は落ち着かなかった。

「もっとひどいことがある」

「聞かなくてもわかる。その意識の裏返しは、肉体にも影響するとかなんとかいうんだろう」

「よくわかったな。でも言いたいことはそのことじゃない。裏返りが起こるとIDにゆらぎが起こる。それは論理的に説明できるレベルの話ではない。だからアテナスはこれを補正しているんだ」

タイガは両手をカウンターに叩き付けた。大きな音が響き、グラスのビールが僅かに

零れた。

「IDそのものを消しているじゃないか。補正なんてもんじゃない」

「アテナスにはどっちも同じことさ」

S・Jは遠くを見ながら言った。

しばらく二人は黙っていた。だが再びS・Jの目に狂気の色が差し始めた。

「でも僕が許せないのはそんなことじゃない。井之方のことだ」

S・Jの口調が強まった。

「あいつは俺が体から抜けた瞬間に全てのアクセスを切り離し、僕の体を完全に冷凍しやがった。おかげで僕はネットの幽霊だ」

S・Jは言うと同時にグラスを木に叩きつけた。グラスは粉みじんになり、そして一瞬後にタイガの手元に出現した。

「あんたは、自分の意思でここにいるんじゃないのか」

「ふん。今じゃあどうでもいいことさ。僕はここが気に入っている。ここは君らの世界より自由だ」

自由という言葉と同時に、砂漠はビーチへと変化した。コバルトブルーの海から、潮の香りを風が運んでくる。空ではカモメが鳴き、沖合ではイルカの群れが子供のようにはしゃぐ。太陽が徐々に西に傾き、水平線が淡い桃色へと変じていく。そして気がつけば南十字星が夜空で誇らし気に輝いていた。手元のグラスはいつだって冷たいビールで満たされている。

たしかに悪くはない。

だが、こんな所に住むのは、老いぼれてからでいいとタイガは思った。

「あんたがここを気に入っているのは分かったよ。それより、どうして俺をここに呼んだ？」

S・Jは今までない真剣な目でタイガを見た。

「井之方をぶちのめしてくれ。あんたじゃないとできないんだ」

「ぶちのめすのはいいが、何で俺なんだ」

「あんたはファクターXを持っているからさ」

「何だ、そのファクター何たらってのは」

「知りたいか？」

「知りたいね」

S・Jがにやりと笑った。

タイガもそれにならった。

「わからない」

「おい、ここまで引っ張っておいて、どういうつもりだ」

S・Jがグラスをさっとタイガの前に差し出す。

「裏返るかどうかを決めているのが、ファクターXらしいということは分かった。ファ

クターXはつながりを持った次元を結ぶ共通解なんだ。ところがその解ってというのが何なのか、さっぱり分からない。数式なのかどうかすら分からない。僕にどうしろっていうんだ」

S・Jはカウンターを手のひらでばんばん叩いた。

そして指を一本立てて、口を開きかけたS・Jの顔が強張った。

「どうやら喋りすぎたみたいだ。済まないがもう行くよ」

「おい、ちょっと待てよ。井之方って何者なんだ。井之方にメモを託した男って本当は誰なんだ」

S・Jはそれには答えず、慌てて帰り支度をはじめると、思い出した様に付け足した。

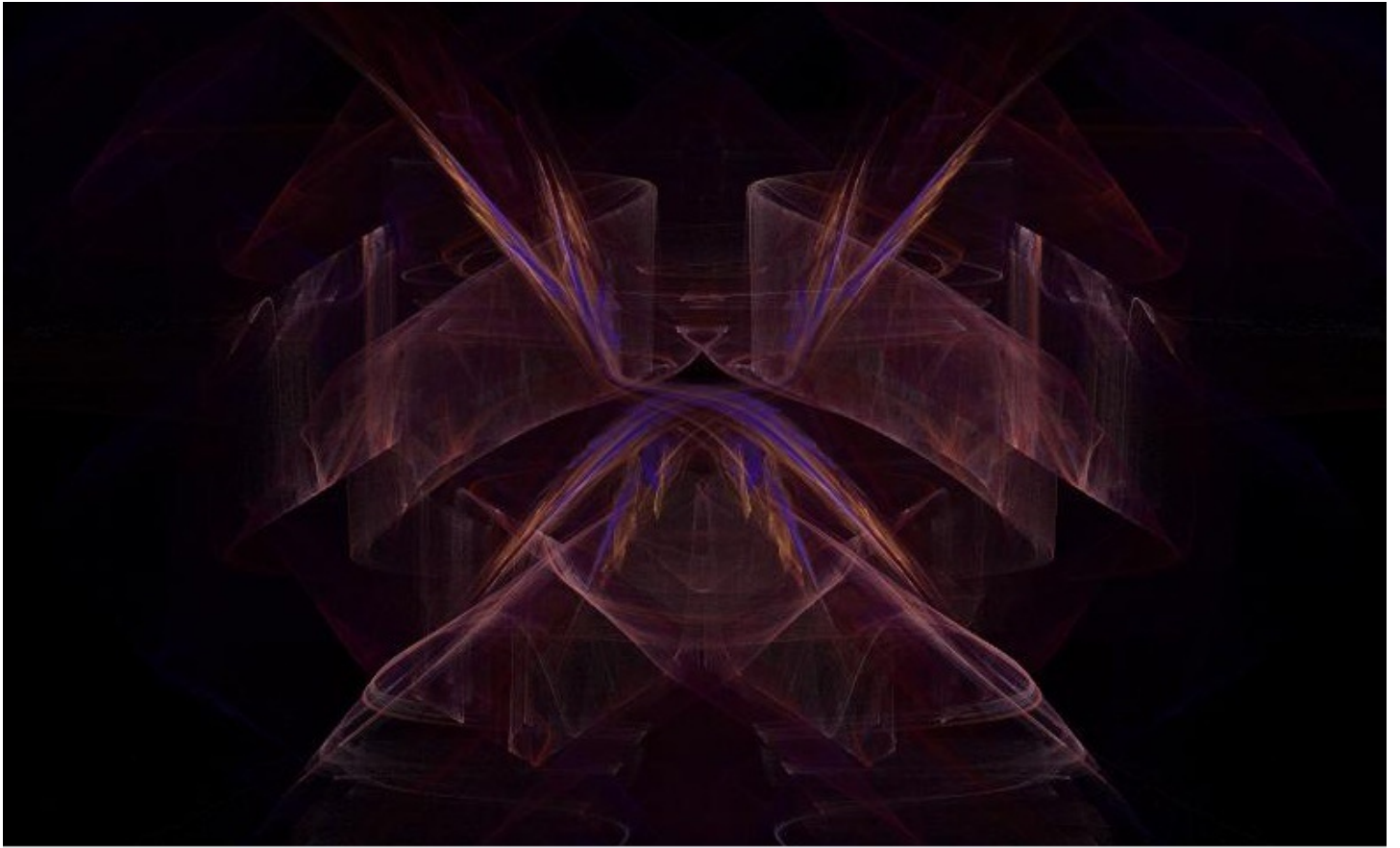
「君は解を持っているんだ。安曇に会え。そうすれば解がなんだかわかるかもしれない」

それだけ言うとまるで煙のごとく目の前から消え失せてしまった。

それどころか、映画のセットをバラして行くかのように、周りの世界がぼろぼろと崩れ始めた。崩れた先には何もなく、闇がどこまでも広がっていた。

足元の砂漠が四散して消え去ったあと、タイガは暗闇に一人とり残された。当りを見回すと、上だか下だかわからないが、遠くに街のようなものがぼっかりと浮いているのが見えた。なんとかあそこに行きたいと考えると、ずっとそこまで移動した。アリスの街だった。

もう黒い小人はいなかった。そのまま、アリスから抜け出ると、キャディラックの前に立っていた。ブライアントが物言わぬ目でタイガを見上げていた。その脇で、いつからいたのか、ゼンがブライアントの血を舐めていた。



「どないすんのやこれ」

ゼンが血の付いた赤い口で言った。

「こんなもの宇宙に放り出してしまえば済むことだ」

ゼンがタイガをじっと見つめる。犬なので表情が読み取れない。

「あんさん、人一人分のデータを消すのがどれほどの仕事を知っとるんか」

ゼンがごろりと横になった。それを待っていたかのように、アリスが火の付いたタバコを加えさせた。立ち上る煙は徐々に攪拌されていくが、いつまでもタバコの匂いは消えない。

タイガは少しずつ不安を感じ始めているのに気が付いた。不安などない。全てをちゃんとなした。ミスはないはずだ。

ゼンが低い声で笑った。牙の間からタバコの煙が漏れ出ている。

「あんさん、データは全て消したから何も問題ないと考えとんのやろ。そりゃあちゃうで」

「何が違うってんだ」

左腕がうずく。

ゼンが前足を額の横に掲げて、トントンと頭を叩いた。

「ブライアントが結婚していたとしたら、奥様はなんで知りもしない男との記憶がたくさんあるのか、不思議に思うやろな。もし、子供がいたとしたら……」

「もういい。止める」

タイガは足元がぐらつく感じがした。いまにも外周通路が溶け出して、宇宙空間まで流れ出てしまいそうな感じだ。

「どうすればいいんだ」

「そやなあ、手がない訳ではないけど、結構難儀やからなあ」

ゼンはタバコをふかしていたが、タイガの目をみた途端にぱっと飛び退いた。

「おっと、物騒なこと考えるのは止めた方がいいで。人殺めた後が面倒なのは分かったやろ。まあ、今は人の姿じゃないけどな」

「そもそも、あんたは人なのか？」

ゼンの目が怪しく光った。同時にマッシュ全体がぐらりと揺れたような気がした。

「S・Jか、そないなこと言うたんは。つまり、あの砂漠のバーにいたのは、あんさんだったちゅうわけや。アホらしいにもほどがあるで。あのアホは自分が居のうなってから、ワイが第四世代を発明したんが、余程悔しいんやろな。そうか、ワイは妖怪かいな」

ゼンはそう言って大笑いを始め、やがてしばらく咳き込んで、息を落ち着かせるのにずいぶんと時間がかかった。アリスが背中を指すった後にカップに酒を注いで飲まずと、ようやくひと段落したようだ。

「それで、あんさんどうするんや。ワイと契約するならブライアントのアホのことは何とかしたるで」

タイガはゼンを見つめた。身体中から汗が吹き出た。ここで間違えれば、取り返しのつかない事態になるだろう。だが、タイガのOBSはタイガの個人マインドバリューがいつの間にか元の値に戻っていることを教えてくれた。

「信じるしかねえだろ。クソ」

「ワイは好きやで。あんさんのそういう、効率的な所」

タイガの脳裏をいつも夢に出て来る僧侶の姿がよぎった。

あの、名も知らぬ僧侶は何を伝えたがっていたのか。それともただの夢なのか。

「準備はええか」

ゼンが近づいてきた。

アリスの銀色の目が怪しく光った。

「アリス、引っぱったれ」

タイガはマッシュ全体が振動しているのを感じた。アリスの街に引き込まれる直前、タイガのOBSが誰かのメッセージを伝えて来たが、すんでのところまで拾えなかった。

アリスの街につくと、井之方が待っていた。

「よう来たで。ほな、急ごか」

井之方がタイガを急かした。なんだか前回と違って、今日の井之方はどこかあせっている風だった。

「そう慌てるなよ。もう決めたんだから。それより、今後の話を教えてくれ。あの警部はどうするつもりなんだ。手間だとかなんとか言っていたが。それに、どうやって火星総督のポストを手に入れるんだ」

井之方は暫く当りを見回してから、

「そやな。ブライアントのやつは暫く放っておいても問題ないやろ。それより火星や」と言い、石段の一つに腰掛けた。

「先づは火星総督であるセーガンに火星を出ていってもらわなあかんわな」

「どうやって」

井之方が眼鏡の奥の目を怪しく光らせた。その狡猾そうな光に、タイガはそら恐ろしさを感じた。だが、もう後戻りはできない。

「そりゃ、ヤツがなんかヘマすんのやろ」

言うが早いか、OBSが火星の事故を検知した。火星基地で不慮の事故が発生し、半年分の燃料タンクが吹き飛んだということだ。たちまちセーガン総督のマインドバリューが値崩れを始める。

セーガンのOBSが原因究明に世界中のデータベースのアクセスを始めた。

「そしたら、どういう訳か、今度はヤツのOBSが故障するわな。まあ、古いOBSやからなあ」

タイガにもセーガン総督が慌てているのが分かった。第三世代のOBSは第二世代に比べて、たしかに長時間肉体から意識を切り離せる。だが、それでもせいぜい一年が限度だ。だから、地球外作業をアンドロイドなどで行う者は、一年に一度、肉体に意識をもどし、休暇を取った後、再びOBSへ意識の転送を行うのだ。それはセーガン総督といえど例外ではない。セーガン総督はこれを効率的に行うため、脳の一部を冷凍せずに残している。

「終いは冷凍カプセルの故障やな。運が悪いのう、ヤツも」

すぐに事故は起こった。

たまたま地球の重力にひきつけられた小さな石が、セーガン総督の肉体を冷凍保存している冷凍カプセルを直撃したのだ。地球周回軌道を回る小さなカプセルに、隕石がぶつかる確率など、計算するのもバカバカしいはずだ。それが起こった。

「運が悪いのう」

それが井之方の言い分。

タイガは身震いした。

OBSが故障し、戻る肉体を失った意識はどうなるのか。消えてなくなるのか。

突如マッシュがガタガタと揺れ出した。まるで全てを悟ったセーガン総督が、怒りをぶつけているかのようだ。揺れはアリスの街にまで及んだ。町中が地震のように振動し、軋み悲鳴をあげていた。

僅かに井之方の顔に不安の色がさした。

「失敗したのか」

「黙れ」

やがて揺れは納まり、街は静けさを取り戻した。

井之方が安心した顔を見せた。

「ほな、行こか」

いくつもの角を曲がり、階段を降り、そして潜り戸を通り抜けた。石畳の迷路を下へ下へと降りていった。そしてたどり着いたのは、ちいさな広場だった。四方を高い壁の建物に囲まれ、空が狭かった。その広場の中央に、石造りの小さな噴水があった。噴水からほとぼしる水がきらきらと輝いていた。

「きれいだな」

そう言ったタイガの心が妙な違和感をとらえた。言ってみれば、何かがずれている感じ。

気になって振り向こうとした時、唐突に背中を井之方に蹴飛ばされた。タイガは階段を転げ落ち、石畳にしたたか顎をぶつけた。

「何しやがる」

振り向いたタイガは啞然とした。

井之方の前に鉄柵があり、広場は牢獄と化していた。

すぐに異様な悪臭が鼻を突いた。

さっきまであれほど美しく見えた噴水が、今ではどす黒いタールのような、ねっとりとした液体に変化していた。液体は泡立ち、時折弾けてはむせ返るような悪臭を周囲にまき散らした。

周囲の壁も何百年もの間に悪臭が染みてしまったように、薄汚い灰色に変化していた。その上を黴のような黒い汚れが覆っていた。

「どういうことだ」

井之方が鉄柵の向こうから、嫌らしいにやにや笑いを見せた。

「どうもこうもあるかいな。ちゃんと契約したやろ」

「ふざけるな。こんな契約をした覚えはないぞ」

「どう思おうが、あんさんの勝手や。そやけど、契約は契約や」

井之方は噴水を指差した。

「ほな、その噴水に入ってもらおうか」

中央の吹き出しから何かの固まりが流れ出し、湿った音を立てて液体の中に消えた。その固まりは毛が生えているようにも見えた。まるで身体の一部のように。

見れば、タイガの足下には骨のようなものが、そこかしこに散らばっていた。そこでようやくタイガは、さっきの違和感の正体を知った。さっき見た美しい噴水の光景は偽装だったのだ。これこそがこの本当の姿だったのだ。

「断る。俺をさっさと解放しろ」

井之方の目つきが変わった。憎悪に燃える目だ。顔の色もどんどんとどす黒く変化していく。

「じゃかましい。入れ」

途端に周囲の壁が中心向かって動き始め、広場が徐々に狭まってきた。

「冗談じゃない」

タイガは鉄柵に組み付いたがびくともしなかった。井之方は手を伸ばしてもぎりぎり届かない所に立ち、冷たい目でタイガを見下ろしていた。そして延ばされたタイガの手を、満身の力で踏みつけた。

「くそがきが。おどれらみたいな利己的な連中は皆消えてしまえばええのや」

あまりに強い憎悪だ。

なぜそこまで憎しみに燃えるのか。なぜその矛先が自分なのかタイガには分からなかった。

井之方から逃れると、なんとか鉄柵を開ける方法がないかと回りを見回してみたが、道具になりそうな物は何一つ見当たらない。このままでは、あの汚らしい噴水にすぐに押し込まれてしまう。

「畜生。助けてくれ」

タイガの悲鳴と同時に、街が悲鳴を上げた。

街の悲鳴は次第に何かのリズムに集約されていく。建物がギターのようにふるえ、不協和音を奏でている。

やがて、不協和音だった音は少しずつ共鳴をはじめ、強弱がつき、ひとつの音楽へと変じていく。

音楽ではない。

「六根清浄。六根清浄」

読経であった。

街がぐらぐらと揺れだした。

井之方の顔に再び焦りの色が見えた。

「しゃらくせえ。どこまでも邪魔な野郎やで」

井之方は今や、尖った耳と曲がった鼻、そして牙を持ち、最早人間の姿とはほど遠かった。

「ええ度胸や。勝負したる」

読経はどんどん強まり、街の揺れが最大になると、壁ががらがらと音を立てて崩れ始めた。

タイガは崩れ落ちる石をよけながら、逃げ道を探し始めた。前方の壁に大きな裂け目ができ、なんとか潜り込めそうなまでに広がった。タイガは建物全体が崩れることなど考えず、思い切って裂け目に飛び込んだ。

ところが、裂け目に全身が入り込む直前、何者かがタイガの足首を掴み、タイガを広

場に引き戻した。

驚いたタイガを見ると、噴水から伸びた黒い蛸の腕のようなものが、しっかりとタイガの足に巻き付いていた。

タイガは必死で腕を蹴飛ばしたが、腕はびくともしなかった。揺れが徐々に納まりつつあった。読経はまだ響いていたが、その響きは少しずつ小さくなっていた。

「待ってくれ」

「うおおおおお」

井之方が雄叫びをあげていた。

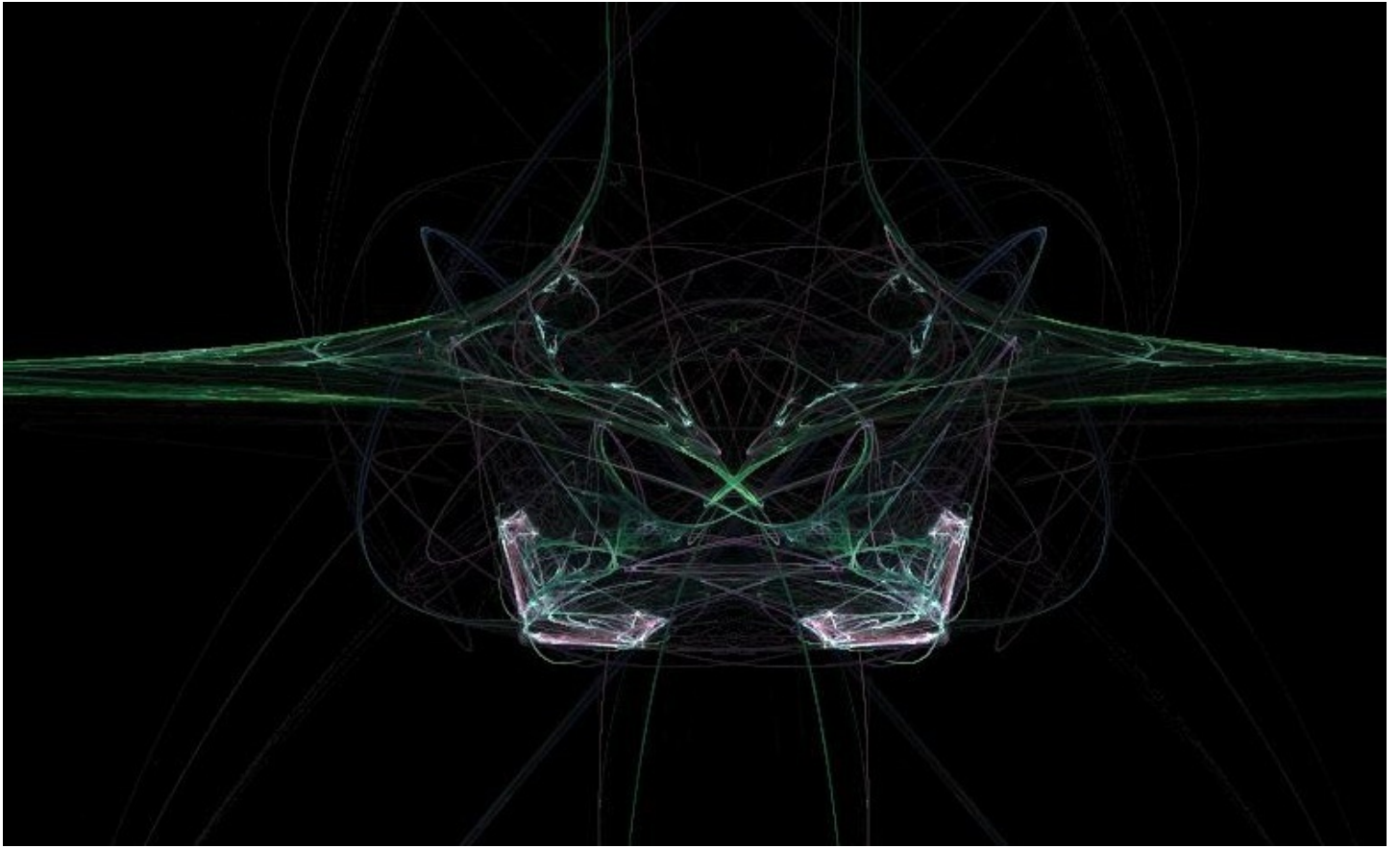
黒い蛸の腕がタイガを引き込み始めた。抗ってもタイガはどんどんと噴水に近づいていった。

目の前の壁が完全に崩れ落ちた。

同時に揺れと読経が止まった。

タイガは黒い噴水の液体に飲まれた。

黒いしぶきが上がり、朦朧としたタイガに液体がねっとりとまとわりつく。液体は得体の知れぬ生物の触手のごとく手足に絡み、タイガを暗い井戸の底へ引き込んでいった。とても冷たかった。地獄は本当にあるのだろうか、薄れゆく最後の意識でタイガは考えた。



これは夢だとタイガは思った。何故なら、前にも同じ夢を見たことがあるから。少なくとも、地獄でない事は理解していた。

だが、次第にこれこそが地獄なのかもしれない、と思い始めた。タイガはまた、曇天の下に生える一本の木に、柿の実のごとく頭からぶら下がっていた。

近くの枝には真っ黒で大きな鴉。鴉にじっと見つめられ、タイガは生きた心地がしなかった。

鴉はひとつ大きな鳴くと、タイガの枝に飛び移り、その鋭い嘴でタイガを挟んだ。猛烈な力で体をぎりぎり締め付けられ、気が遠くなった。

次の瞬間、鴉に枝からもぎ取られ、身体中を痛みが突き抜けた。

鴉が羽ばたき、タイガはあっという間に空高く連れ去られていた。

鴉に遥か高みまで持ち上げられたかと思うと、今度は鴉はぱっと嘴を開いた。

支えを失ったタイガは、真っ逆さまに地上めがけて落下していった。

タイガは硬い場所に落下した。痛くはなかった。視界が開け、大きな木の根元に転がっているのがわかった。夜だったが、月光が目眩しかった。目の前には、小高い丘へ小道が伸びていた。人ひとりやっと通れる程度の道の両側には、低木が並び月光にその姿を晒していた。そっと手を伸ばせば、葉のしっとりした感触が心和ませてくれる。道は丘の上にひっそりと建つ御堂に続いていた。

タイガは御堂に向かった。目的があった訳ではない。ただ、木の下に転がっていても

仕方ないし、御堂に行けば何かがあるだろうと、漠然と思っただけだった。だが、御堂が近づくとつれ、タイガはどうしても御堂に寄らねばならないと、感じ始めていた。

間口一間ほどの小さな御堂であった。屋根瓦は割れ、草が生えていた。何が祀ってあるのかと、薄汚れた扉の格子から中を覗いたが、暗くて良く分からなかった。扉を開けたタイガは思わず驚きの声を上げた。外見に比べ、中はあり得ないほど広かった。まるで道場である。百人は座禅の組めそうな本堂の一番奥に、蝋燭の明かりの中、僧侶が一人背を向けて座っていた。

タイガはそれが誰だかすぐにわかった。あの、夢の僧侶である。そして彼こそがS・Jが会えといった男に違いない。名は安曇。俺はこの男に呼ばれたのだと思った。

タイガは本堂に上がると、大股で安曇に歩み寄った。静かな読経が心地よく耳に響く。

タイガが安曇の真後ろに立った時、つと読経が止んだ。

「おい、あんたが安曇か」

安曇は静かにタイガに向き直った。険しい目をしていて、小柄だが、肩の感じから頑健なことが伺える。左の目の下から耳にかけて、横一本の傷が走り、荒々しい印象を伝える。年齢は見た目からは分からなかった。幾重にも刻まれたしわが、高齢だと推測させたが、眼に宿る力は相当なものであった。

「死人がなぜ俺を呼ぶ」

安曇は暫くタイガをじっと見つめていた。

「罪を犯したな」

タイガはみぞおちの辺りがぎゅっと締め付けられた。罪など犯してはいない、と言いたかったが、射るような安曇の目の前で、嘘など何の意味もないと感じた。この男は全てを知っている。そう思えて何も言うことができなくなった。

やがて安曇は蝋燭に向き直ると、再び先ほどのように読経を始めた。

その読経の響きがタイガにはどこか懐かしく感じた。遠い記憶を呼び覚ますような、心の奥底を振るわせる響きだった。そしてふと、切ない気持になり、ぼろぼろと涙を流し始めた。その涙が、俺は罪を犯したのだと、強く感じさせる。

「俺は...私は罪を犯しました」

その声はどこか遠く、他人の声のようであった。

安曇の読経は止まらない。そしてますますタイガの胸をぐいぐいと締め付けてくる。

タイガは床に膝をついた。涙が床を濡らす。蝋燭が涙の跡にわずかな光を投げかけてくる。遠い星のきらめきのごとき小さな光である。その小さな光がタイガの胸を射抜いて行く。その度にタイガは過去へ過去へと押し戻されて行った。

耳にあの音が蘇る。空気を切り裂き、真逆さまに地上めがけて落ちて行くときの音。音速を突き抜けるときの衝撃音と目もくらむスピード。次元を超えてしまったようなあの浮遊感。全てが過去の栄光だったが、それでもあのときのタイガは輝いていた。そ

して、まぎれもなく、存在していた。

しかし、あの頃のタイガは迷い続けていた。ライバルたちとの攻防。新たなるOBSの登場。タイガの存在は日々脅かされていた。どうすれば勝てるのか、悩み続ける日々が続き、遂にタイガは降りたのだ。己の人生から。

「私はどうすればよかったのでしょうか」

読経が止まった。火影が揺れる。安曇の姿も揺れる。目に見える全てが揺れ動く。

「悩むことだ」

「悩んだ。でも答えなんか出ない」

タイガの叫びに、安曇がわずかに振り向いた。視線が胸を射る。

「ならば問おう。人は何故生きる」

「そんなこと」

タイガは言葉に詰まった。答えられない。

「死とは概念にすぎぬ。だが今のお前は死体に等しい。生きてすらいない」

あの頃、タイガは勝つために生きていた。だが、今はどうだ。何のために生きている。火星総督になりたい。でもそれは生きる意味なのか。そもそも、本当にそんなものになりたかったのか。タイガはレースを引退したその時から、目的を見失っていたことに気がついた。

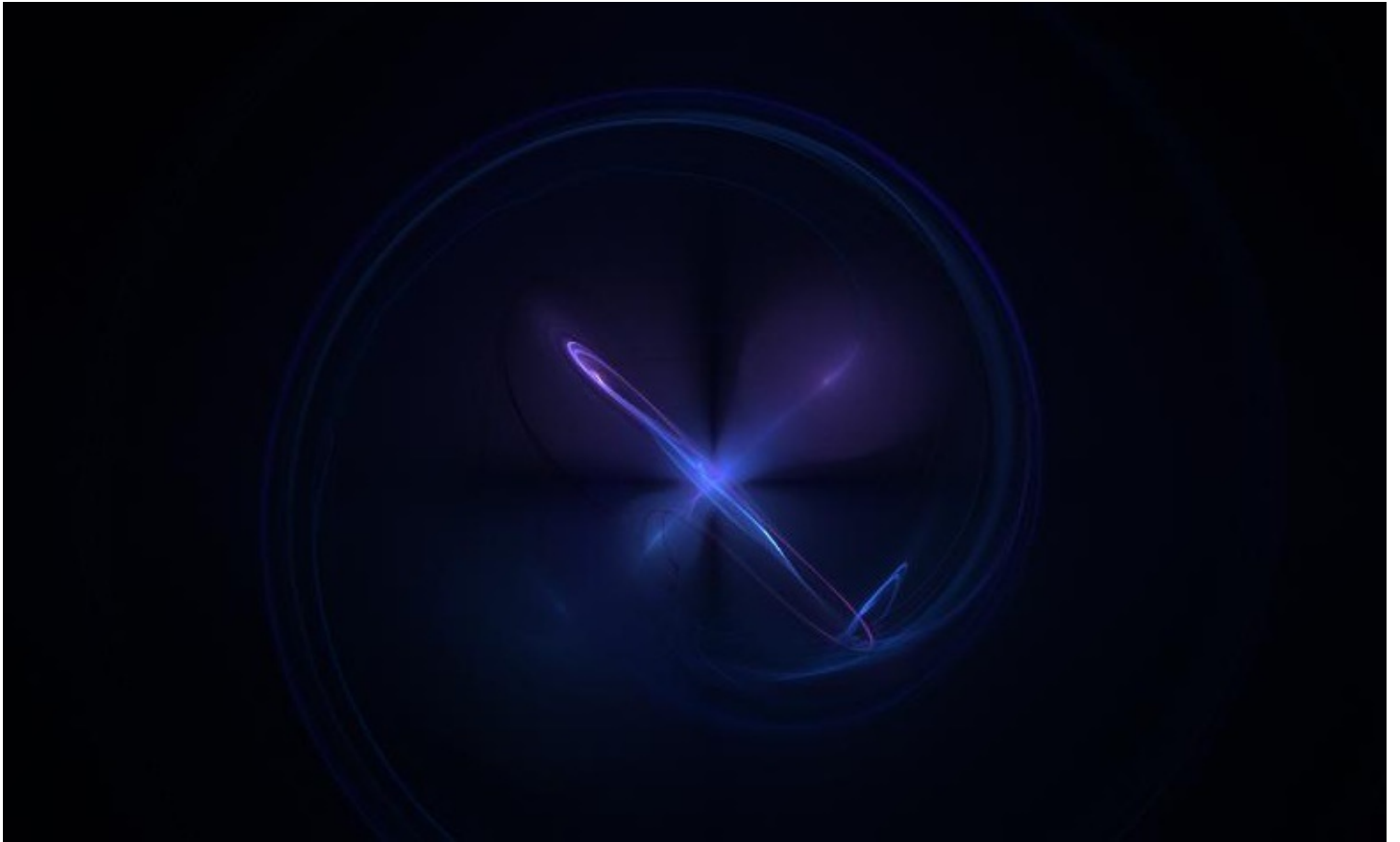
確かにあの頃は悩み続けていた。どうすれば勝てるのかと。レースで音速を超える度に、目の前に広がって行く暗黒の深淵。そこに飛び込みさえすれば、すべての悩みから解放されると信じていた。でもいつもタイガは深淵ではなく、ゴールリングに飛び込む道を選んだ。暗黒の深淵に飛び込む勇気なんかなかった。

再び悩み始めたタイガの心を映すように、踏みしめる床が心許なくなってきた。安曇に近寄ろうと、一步を踏み出した足は、すでに踝まで床に沈み込んでいた。いつしかタイガは腰まで床に沈み込み、藻掻けば藻掻くほど沈んでいった。

やがて床だった場所は流砂のように流れ出し、タイガを飲み込み始めた。蠟燭が爆ぜ炎が揺らいだ。次の瞬間にはタイガは完全に飲み込まれて見えなくなっていた。

「学ぶがよい」

安曇がぼつりと呟いた。



タイガは広い砂漠に立っていた。頭上に垂れこめる雲は、ざわざわと蠢いている。よく見ればそれは全て細かな歯車でできていて、全てがガチャガチャと噛み合って回っている。踏みしめる大地ですら、細かな歯車の集積だ。すべてが、ガチャガチャと回っている。

数歩前の大地が盛り上がり、何かを形作っていく。それはみるみる人の形へと変貌した。その顔には目鼻はなく、たくさんの歯車が蠢いている。

「誰だ」

タイガにはそれが何者なのかももう分かっていた。

「お前はアテナスなんだろう」

途端に、一人だったそれは分裂して、六人の姿に増殖した。六人のそれらは滑るように大地を移動して、タイガを取り囲んだ。

「その通りです」

アテナスを目の前にして、タイガは徐々に冷静さを失って行くのがわかった。全ては彼らの責任ではないのか。機械という立場にありながら、人の人生を弄んでいる。

気がついた時にはもう走り出していた。

「貴様らが」

言うなりタイガは正面の一人に殴りかかった。

「黒幕か。ふざけやがって」

だが、タイガの突き出した拳はアテナスの顔を手応えなく突き抜けた。

アテナスは顔から細かい砂となり、わずかな時間宙を漂ったが、やがて別の場所に再び実体化して現れた。

「お前ら一体何人の命を奪った」

タイガは別の一人にも攻撃を仕掛けた。また隣の一人にも体当たりを食らわした。だが、結果はどれも同じだった。タイガの攻撃はまるで意味をなさなかった。

「あなたも同じでは？」

アテナスの言葉にタイガは思わず拳をだらりと下げた。その言葉は深々とタイガの心を抉った。

「ショックですか？」

「うるせえ」

タイガは戦う気力も失せ、どっかと地面に腰を下ろした。

「テラネットで会う時と姿が違うじゃないか」

「テラネットで見えるのは、エネルギー体として私たちを、あなた方がそう感じているだけで、今の姿は私たちの意識の形を、あなた方に理解しやすく示しているものです」

理解しやすい形が歯車の顔とは、理解に苦しむ。だが、容姿などどうでもよかった。タイガにはどうしても聞かねばならない事があった。

「何故、井之方に手を貸す？」

アテナスは躊躇なく、六方向から答を伝えてきた。

「それが最も理に適っているからです」

「理に適うだって？悪党に手を貸すの、どこが理に適うってんだ」

アテナスはゆっくりタイガの周りを回り始めた。歯車の風が間を吹き抜けて行く。

「それは存在意義の違いです。私たちコンピューターはどんなに進化しようとも、人類を補佐する為に存在します。しかし人類を含む生命は、存在する事に意義があるのです。何故ならば、生命とはエネルギーの在り方として、とても特殊な形態なのです。つまり、存在自体が目的なのです。私たちコンピューターは、存在が存在する為の存在という事になるのです」

「何だよ、ややこしいな。それがどうして、裏返しみたいな事件の関与と関係するんだ」

「人類はそのエネルギーの大きさから、進化しなければならない存在なのです。その手助けをしているのです」

「進化だって？」

タイガは全身を震わせて笑い始めた。人類はすでに遺伝子をバラバラに組み直しているが、人類の一線を越えられないでいる。いくら脳を改造しても、200をこえるIQの人間は現れていない。

「肉体ではないのです。ハードウェアがいくら進化しても、私たちの意識は人類に並ぶ

事はありません。なぜならば、エネルギーに比例して意識形態も違うからです。同じように、人類がいくら肉体改造しても、アンドロイド化しても、進化する事はできません。必要なのは、その方法を学ぶことなのです」

「じゃあ、どうしろってんだ。あの坊主みたいに座禅でも組めっていいのか」

タイガは鼻で笑った。

「ファクターXを使うのです」

タイガのせせら笑いが途端に止まった。

「おい、ファクターXって一体何なんだよ。どいつもこいつも、意味不明な事ばかり抜かしやがる」

タイガは歯車の砂をアテナスに投げつけた。砂はアテナスの体に溶け込んでいった。

「馬鹿にしやがって」

「ファクターXは解ですよ」

「解？まるで分からねえ」

「そう、分からないのです。私たちも、井之方たちも解を理解したい。だが、定理は今だ導かれていません。私たちはS・Jが開発した第三世代のパラメータを変化させて、第四世代の設計図を、別座標のS・Jから入手した。それは、私たち機械だからできる事なのです。しかし、私たちがいくら進化しても、無意味なのです。私たちは副産物でしかないですから」

「別座標のS・Jだって？どうやってそんな事ができるってんだ」

「座標がかわっても、私たちは構成要素が変化するだけで、意識形態はほとんど変化しないのです。なぜなら、私たちの意識形態は論理的なものでしかないからです。しかし、あなた方はそうではない。にもかかわらず、私たちはあなたのチップの中に、唯一ファクターXを認めることができました。ファクターXは論理と非論理の融合解です。それは偶発的なものかもしれない。それでも解に違いない」

アテナスたちはガチャガチャと顔の歯車を回転させながら、徐々に輪を狭めてタイガに迫ってきた。

「あなたしかいないのです」

「あなただけが解を持っている」

「あなたは定理を見つけなければならない」

「探すのです」

「定理を」

「真理を」

「さあ」

六人のアテナスたちは腕を組み、タイガを中心に物凄い速さで回転した。風が巻き起こり、歯車の砂嵐がもうもうと立ち込め、息をするのもままならなかった。遂には巨大な竜巻となり、タイガを空高く吸い上げた。

空高く舞い上がったタイガが見たものは、空を覆い尽くす歯車でできた巨大なカラスだった。いやそれは天空そのものであり、大地そのものでもあった。カラスはこの世界全てであった。

カラスは嘴を開くと、星が砕け散るほどの声で鳴いた。

タイガは全身の細胞全てが震え、畏れを抱いた。同時に頭の中で何かが弾け、急に視界が暗くなった。カラスが頭の中を通り過ぎていった。

カラスが消え去ると、闇の質が変わった。やや、重く濃密で僅かに揺らいでいるような闇であった。

その闇に僅かな光が灯った。光は儂く、力ない存在だった。

やがて光が揺らめき、力を増していった。その光が照らし出したのは、貌だった。深い皺が刻まれ厳しい表情をしている。その中心の眼がタイガの心を射抜く。

固い床がしっかりとタイガを支えていた。先ほどの御堂であった。そして、安曇がタイガを見詰めていた。

「戯言を言っていたかね」

「人を殺しておいて、理に適っているとぬかしやがった」

「彼らには真理を掴むことはできない。なぜならば、彼らには終わりが無いからだ」

終わりがなければ、悩みもないというわけか。

「隣の部屋に、お前の求めている答がある。襖を開けて見よ」

隣とを隔てるのは、一對の襖。板を貼っただけでなんの装飾もない襖。引き手の周りがこすれて白くなっている。そのなんの変哲もない襖を、答えがあると思えば思うほどなかなか開けられない。

タイガは意を決して、ゆっくりと引き手に手をかけた。

俺の知りたい事？

それは、一体何なんだ。

井之方の正体？

本当の黒幕？

そんな事、本当に知りたいのか？

緊張で喉がからからに乾いた。

タイガが安曇を振り向こうと思った瞬間、

「怖いか」

と安曇。

タイガは指に力を入れ、一気に襖を開いた。

真っ暗な部屋に、僅かな蠟燭の光が作るタイガの影が伸びる。

その影に重なるようにして、誰かが立っていた。

やせ細った両腕を抱くようにして立ち、長い髪を前に垂らしている。その髪の間から覗く目の独特の光には見覚えがあった。タイガを引退に追い込んだ少女、夕チバナトモ

エだ。

タチバナトモエはふらふらと、二、三步前に進み出ると、急に目を剥き叫んだ。

「戦え。私と戦え」

そしてタイガの喉に手を伸ばした。

「放せ」

「どうした。戦え。それがタイガという男の存在意義だろう」

容赦無く締め上げて来る手を、タイガはどける事ができなかった。

「お前はいなくなったんだ」

「私はここにいる。誰が何と言おうと、私はここにいる。もし私がいらないというならば、この悩みと苦しみは何なんだ。戦わないのなら、お前こそ消えてしまえ」

心の叫びを最後にタチバナトモエは消えた。しかしその絶叫は耳にこだまし、いつまでも消えなかった。

蠟燭の炎が揺らぎ始めた。安曇の姿も揺らぎ始める。やがて、濁流のような闇が全てを流し去って行く。

もはや全てが闇の中だった。タチバナトモエも安曇もいない。光はどこにもなかった

。

身体中の感覚もなく、落ちているのか、昇っているのか分からなかった。自分の存在すら怪しかった。

何か、温かさを感じた気がした。タイガはその温かさに向かっていった。母親の腕の中のような温もり。なにも要らない。地位も名誉も、身体も、光すら要らない。そして、悩みも苦しみもない。ただ温もりがあるだけ。タイガは安らかな気持ちのまま、自分が誰か、何をすべきか忘れていった。そして静かに眠りに落ちた。



ゼンはじっとアリスの様子を見守っていた。

アリスは目を瞑ったまま、マネキン人形のようにじっと立っていた。やがて、小刻みに震えはじめた。

ゼンはゆっくりと立ち上がると、のそのそとアリスの足元まで歩いて行って、アリスの顔を見上げた。そしておもむろアリスに飛びかかった。

アリスはその勢いで後ろに倒れたが、それでも目を開かなかった。代わりに口を大きく開き喘ぐように胸を上下させた。

ゼンはそれを見て開いた口に鼻先をぐいと押し込んだ。

アリスの口が異様なほど大きく開かれ、ゼンの頭が丸ごと口の中に隠れてしまううと、暫く中で何かをした後ゼンが頭を引っこ抜いた。口に何かを啜っていた。

ゼンは啜っていた物を床に置くと、クンクンと匂いをかいだ。ゼンの鼻先には涙型をした小指の先ほどの大きさの、透明な石が転がっていた。見た感じは水晶によく似ていた。

アリスの目がゆっくりと開いた。

ゼンがその目を覗き込む。

「できたの？」

アリスが囁いた。

「ああ、一時はどうなるかと思ったが、できたで。完璧や」

アリスは上体を起こすと、ゼンの鼻先の石を拾い、期待を込めて目の高さに掲げてみた。それは何度見ても美しかった。

「お祝いね」

「そやな」

アリスが立ち上がり、祝杯用の酒を取りに行こうとすると、キャデラックの陰で何か動いた。アリスとゼンはそちらに向き直り、そしてため息をついた。

キャデラックの陰から出てきたのは、血まみれのブライアントだった。

ブライアントの手足はひどくねじ曲がり、歩く姿は最初は滑稽ですらあったが、一歩一歩足を動かす度に、曲がっていた場所が真っ直ぐになっていった。それぞれ違う方向を向いていた両の目は、今や真っ直ぐにゼンを見ている。

「けたくソ悪い」

ゼンが呟いた。

「ご挨拶じゃないか」

ブライアントの目からはまだ血が滴り、涙のように跡をつけている。

「何も言っとらんがな」

もちろん、ブライアントがゼンの、つまり井之方の言葉を聞きのがしていないことは、井之方も知っている。こいつが見逃すなんてことはあり得ない。

「私が助けてやらなければ、あいつに逃げられていたところだぞ」

井之方は苦々しげに視線を外した。

「ふん。まあいい。仕事は済んだみたいだな。じゃあ、契約通り品物を頂こうか」

今やブライアントは、血で汚れてこそいるが、完全に元の体に戻っていた。それは崩れた積み木を、もう一度組み直したように完璧であった。

「分かるとるがな。誰もあんたを出し抜こうなんて考えとらん。ほら、これや」

井之方は涙型の石を啜ってブライアントの足元に置いた。

ブライアントはそれを拾い上げると、光に透かして見、満足そうに頷いた。

井之方がブライアントを物欲しそうな目で見上げた。

ブライアントはその視線を無視して、じっくり時間をかけて石を眺め、次に横たわっているタイガに目を向けた。

「ちょい待ってえな。その身体はワイの取り分やったはずや」

ブライアントが井之方を睨み付けた。有無を言わさぬ表情だ。

「私に事故車に乗れというのか」

「あんたの好きにしたらええ」

声が怒りに震えていた。

ブライアントはそんな井之方を蔑みの目で見ていた。だが、唐突に力なく床に崩れ落ちた。横たわるブライアントの身体は、どこか脱ぎ捨てた服のようだ。

そしてすぐに、タイガがむくりと上半身を起こした。

タイガは見なれぬものでもみるように、黒く変色した己の手を見つめている。裏返された腕が、みるみる元に戻っていった。

「悪くない。いや、悪くないなんてものではない。素晴らしい」

タイガが言った。

「この身体は実に素晴らしい。石もよくできている。今回は言うこと無しだ」

タイガは暫く身体を動かしてみて、満足したのか石を拾い上げるとポケットにしまった。

「次も頼んだぞ」

タイガは笑い声をあげながら、

「だからこの仕事は止められない」

と呟いた。それから、ふと、タイガの胸元の小さな石に気がついた。

「ほう、地球の欠片か。これも返してもらわないとな。こいつはマザーの一部だからな」

タイガはそう言うと、胸元から地球の欠片と呼んだ石をむしり取った。血が噴き出したが、気にする様子はなかった。それは小指の先ほどの小さな、青く光る美しい石だった。タイガは石を光にかざして見てから、さっきと同じようにポケットにしまい、シャトルに向かって歩きはじめた。もう井之方の方など見ようとしなかった。

タイガがシャトルを発進させるのと同時に、ブライアントがむくりと起き上がった。起き上がると同時にブライアントは床を殴りつけた。タイガが去った方を睨むその目は、復讐を決意した者の目だった。だが、その目に僅かに諦めの色が生じ、やがて今以上の猛烈なる執念の炎が湧きあがり、視線は窓から望める地球に向けられた。その成就できない復讐の矛先は、この世界に住む全ての生物に向けられていた。次元の狭間に生きるしかない者、正確には生きてるとさえ言えない者の、生命に対する怒りだった。

ブライアントはゆっくりと手を動かしてみた。

「まあ、こないなもんかな。しゃあないやろ。しばらくこの身体で辛抱しとくか」

そんなブライアントの胸ぐらをアリスが掴み、乱暴に引き立たせた。

「約束が違うじゃない。それ私にくれるんじゃないの」

アリスが言った。

「しゃあないやろ。最初に約束破ったんはあいつや。どうせいつちゅうんじゃ。おどれならあいつに勝てるんか？どうなんじゃ」

ブライアントになった井之方はそう言ってアリスを突き飛ばした。そして、

「アリンコが鳥に敵うはずがないんや。鳥は飛べるんやから」

そうぽつりと呟いた。それはどれほど周到に策を労しても、全く歯が立たないと知っている者の言葉だった。蟻は鳥にはなれない。

「じゃあ、私はどうするのよ。またこんなポンコツに入れってこと？」

井之方が、床に転がるゼンを指差した。

「元の身体に帰るか？」

アリスはゼンを見下ろし、ゆっくりと首を横に振った。いくらなんでも、もう犬には戻れない、と思った。一度ヒトというものを知ってしまったら、犬なんて五十年前のアンドロイドと一緒に。だったら、まだこの出来の悪くないアンドロイドの方がましだ。本来この次元にはないはずの設計図から造られたアンドロイド。

「身勝手だわ」

アリスが呟いた。

その言葉が誰に向けられたものなのか、井之方には十分分かっていて。それは井之方に向けられた言葉であり、タイガの身体を持っていったヤツに向けられた言葉であり、そしてタイガに向けられた言葉でもあった。自分より完全な世界に住む全ての者に対する言葉であった。その言葉の意味は井之方自身が一番よく分かっていて。

なぜなら、井之方自身生命ではないからだ。井之方は次元の狭間の存在だ。生命が発するエネルギーの残滓によって形成されている。だから生命のようであり生命ではない。どんな次元にも到達できる。だが存在意義はない。犬ころのような生命にすら存在意義があるというのに。

井之方は寂しそうに背を向けているアリスを見ながら思った。ヤツが持って帰った、タイガの意識が封じ込められた石とタイガの身体を何に使うのか、知らないし知りたくもない。知ったところで、命ある者の考えることなんて理解できない。

ただ、次元が上がろうが下がろうが、生命は身勝手だ。だからこそ、いつか必ず叩き潰すと再び強く誓った。



タイガは、正確にはタイガの身体を手に入れた何者かは、シャトルを自動帰還にセットしたことを確認すると、シートにゆったりと身体をもたせかけた。今回の仕事は実に順調に完了した。井之方がゴネるのは想定の内だった。だが、案外井之方は素直に引き下がった。普段の心構えの結果と言えるだろう。何者かは、満足そうに頷くと目を閉じ、じっくりと人間の肉体を堪能した。若く力強い肉体を。そして肉体は素晴らしいと感じた。特に非合理性が。

NARITAのエレベーターに到着するのは5分後だ。後は地上100km上空からのんびりエレベーターで降下するだけだ。何者かがそう考えていた時、それは起こった。ポケットに無造作に突っ込んだ、涙型の石が小刻みに震え始めた。何者かが石を取り出してみると、石は手の上でもがく様に震え、そしてその美しい表面に細かなひびが刻まれた。

タイガは間違っていると悟った。タイガを虜にした青い光は、タイガに仮の安らぎを与えてくれはしたが、それはどこか薄っぺらく、物足りなさを感じさせた。

タイガは眠りに落ちて行く時のような、流される感覚の中で、一体なにが不満なのかを考えていた。意識の底へと落ち続けながら。何が違っているのかと。

はるか後方で何かがタイガを呼んでいた。その声は徐々にタイガに追いついてきて、そしてこう叫んでいた。

「戦え。私と戦え」

と。

それはタチバナトモエだった。

タチバナトモエの声はタイガに並ぶと、殴りつけるように言葉を浴びせ、そして暗がりの底へと消えていった。

タイガは何が足りないのか必死で考えた。

タイガがタイガであり続けるために必要なもの。それはタイガがタイガとして歩んで来た道だ。信念こそがタイガの誇りであり、戦いに明け暮れ、未来を掴むために思い悩むこと自体がタイガの人生そのものであった。アテナスはタイガに何を言ったのか。理に適っていると。だが、人生は往々にして理に適っていない。それこそが人生であり、人間というものではないか。効率を求めるならば、存在自体不要だ。アテナスによれば、人間は存在自体が目的なのだという。ならば、重要なことは進化することではない。

栄光の日々にタイガが感じていたことは何か。時速1000kmものスピードで地上に落下している時に、全身を振るわせる表現できないあの感覚は何だったのか。自分が自分でなくなり、大気にとけ込み、まるで大地と一体化したような感覚。完全意識すら超えた完全意識。いわば全てとの調和。そして共存。

タイガは唐突に理解した。

これこそがファクターXだったのだ。

ファクターXとは、苦しみの中からようやく辿り着いた、生命は共存しなければならないという悟りであり、悟りに辿り着くための悩める日々そのものだ。そんなものを機械が理解も導き出すこともできるはずがない。アテナスには永遠に辿り着けない解に達しない。

全身から力が湧き出るのを感じ、タイガは狂った様にもがき始めた。あたたかな光がタイガを誘った。だがもう、タイガはそんなものは見ていなかった。ここから出なければならない。タイガは満身の力で吼えた。

何者かの掌の上で震え続けていた石が、突如弾けるように真っ二つに裂けた。

同時にシャトルの機体が大きく揺れた。一斉に非常を告げるランプが点灯する。

何者かにはすぐに何が起きたのかわかった。タイガの意識がシャトルのOBSにアクセスし、シャトルを乗っ取ったのだ。何者かはすぐにシャトルのコントロールを取り戻さんと、第四世代のOBSでアクセスを始めたが、時すでに遅かった。タイガの目の奥で何かが揺らいた。タイガの身体の中の何者かが、自分の力で取り込めないものがあると悟ったからだ。

非常回路が動作を始めていた。爆発を防ぐために全てのエネルギー回路が切り離され、燃料が宇宙空間に放出されていた。シャトルはもはやただの棺に等しかった。そして重力に引かれて落下を始めていた。このままでは、約5分で地上に激突する。シャトルの非常ランプの点滅が、タイガの意思を伝えるように点滅し続けていた。

何者かは一瞬苦々しげに顔を歪めると、タイガの身体から飛び出した。飛び出す瞬間、何者かは僅かに微笑んでいた。新しいおもちゃを見つけた子供のように。

空いた自分の身体にタイガが飛び込んだ。何と言おうと自分の身体が一番だ。

強い振動がシャトルを揺らした。大気にぶつかった衝撃だ。

「私と戦え」

タチバナトモエの声が頭の中でこだまする。

「戦わぬなら、俺が生きる意味はない」

タイガは身体中が震えた。

今も握り締めた拳が小刻みに震えていた。

タイガはシャトルの操作を手動に切り替えた。懐かしい振動が操縦桿に伝わってくる。油圧で操作可能な機能はわずかばかりの大きさの方向舵と、エアコンプレッサーだけである。操縦桿をめいっぱい手前に引く。重たいシャトルが方向を変える感覚は全く無かった。助かる見込みなんてまるでない。それでもタイガは操縦桿を力一杯弾き続けた。

「いようにさせるか」

タイガはそう叫んでいた。

シャトルは真っ赤に燃える火の玉となり、電離層を突き抜けた。急に視界がひらける。正面に真っ青な海が、無限にも思える広がりを見せている。

美しいと思う。同時にタイガはアリスの言葉を思い出した。

「マザーはあなた方を好きではないわ」

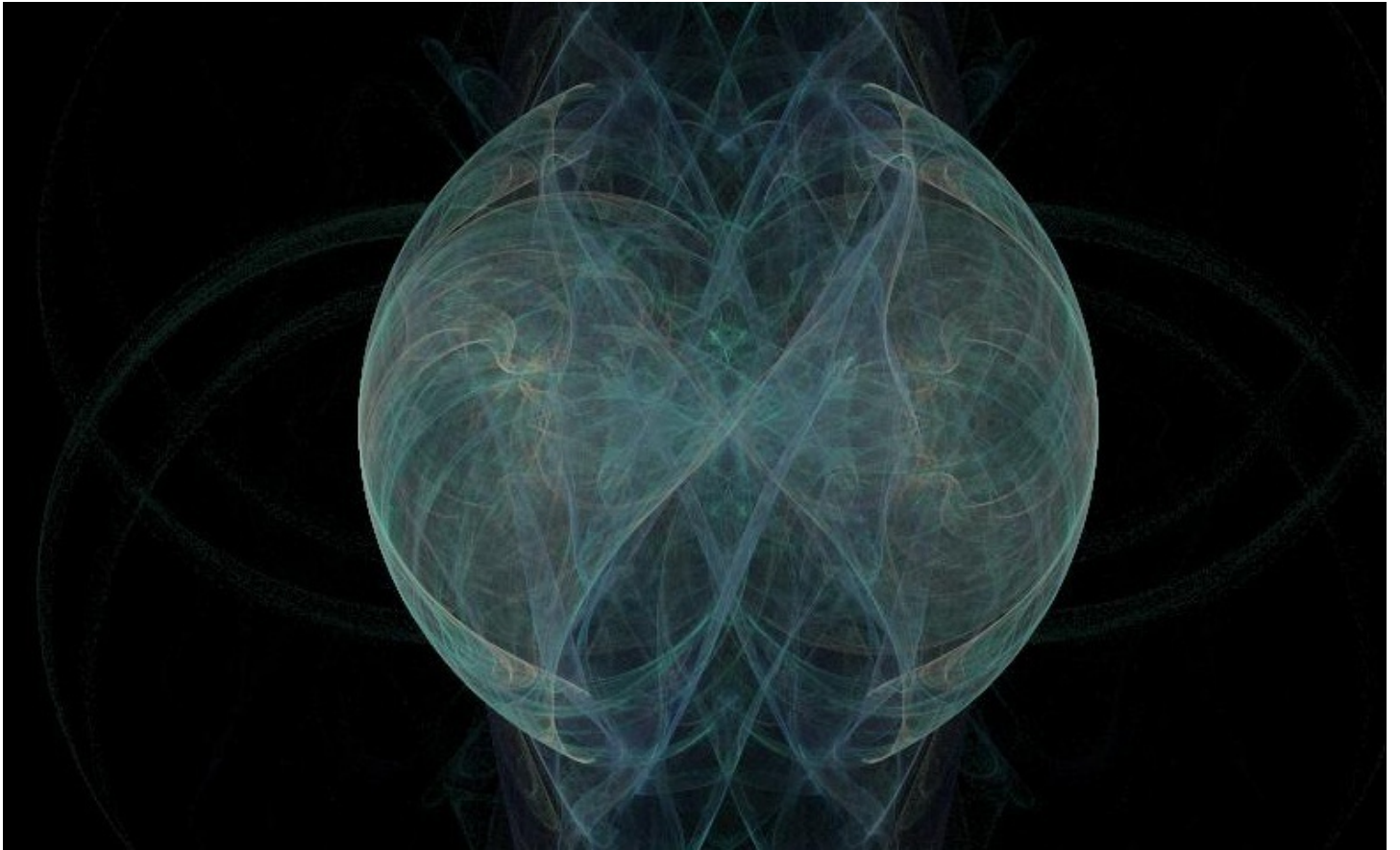
人類が地球と歩んできた時間は、ほんの僅かかもしれない。それに気に入らないこともたくさんしてきただろう。だが、俺たちにだって、生きる権利というものがある。五次元だからなんだよ。大人は子供を守るのが役目だろうが。ファクターXだか、第四世代だか知らないが、そんなものは、俺たちがいつか飛び越えてやる。俺たちの誇りで。

「上等だよ。受けてたってやる」

雲を突き抜け、海面までの距離は5キロメートルほどだ。数秒で勝負がつく。

タイガは血が騒いだ。タチバナトモエの顔を思い出す。終わりかもしれないし、始まりなのかもしれない。だが今感じているのは、紛れもない充実感だ。

生き抜いてやる。そう思いながら、タイガは青い地獄へと突き進んでいった。



ホテルの一室に二人の女が向かい合って座っていた。

部屋の窓からはどこまでも続く青い海が見渡せる。遠くの空には小山のような雲があり、その下に暗い影を作っている。暗い雲の下ではスコールが降っているのだろうか。だが、そんな暗ささえ、明光風靡という言葉に押し込まれそうなほどの自然の情景が見渡せる部屋だ。

部屋には明るい光が溢れている。豪華なシャンデリア、趣のある調度品の数々。人がゆったりとした時間を過ごすために、考え抜かれた空間。

そんな空間に対峙する二人の女は、どちらも目を見張るような美しさであったが、明らかな違いがあった。

一人の女は短めの軽くウェーブした金髪に、深みのある青い瞳を持ち、常に優しげに微笑んでいる。それは疲れきった心に、暖かな陽射しとなって降り注ぐ、そんな微笑みだった。

もう一人の女は長い光沢のある黒髪を持ち、きりりとした顔の造りをしている。全体的にシャープな感じで英知を感じさせる雰囲気だ。

だが、黒髪の女の目だけには英知のかけらもない。どんよりと曇り、粘つくような光を放っている。誰もが嫌悪感を抱くに違いない。この身体に入った何者かの特徴なのだろうか。

そして二人に挟まれたテーブルには、その場の雰囲気にまったくそぐわない物が置か

れていた。

死体。

全身を裏返され、どす黒く変色した死体であった。死体からは体液が滴り、床を赤黒く濡らしていた。床の染みの脇には銀のブレスレットが落ちていて「ブライアント」と刻印されていた。

「なぜ、裏返したの？」

黒髪の女がかつての自分の身体を見ながら聞いた。

「私はあの姿のほうがかわいくって好きよ」

金髪の女が微笑みかけた先には、黒い仔犬が寝そべっていた。黒い仔犬には今また井之方が入っている。

井之方は死体に一瞥をくれると、一瞬何かを言いたげな表情をしたが、すぐに諦めたように再び寝そべってしまった。

金髪の女が続けた。

「あなたこそ、なんでその身体にしたの。あなたは男の姿の方が似合うわよ」

黒髪の女は長い髪を手の甲で滑らせ、ふわりと流れる髪をうっとり眺めた。

「いいじゃない。こういうのも悪くない」

「好きにすればいいわ」

金髪の女は死体の脇に置かれたティーカップを取ると、美味しそうに紅茶を口に含んだ。

「いい香り」

死体の匂いなどまるで気にならないようだ。

金髪の女が紅茶をティーカップの中で揺らしながら続ける。

「あの男はもうだめね。簡単に私たちに心を許さないでしょう。安曇やS・Jも味方に付いてしまったし。別の獲物を探しましょう」

「でもどうやって」

金髪の女が微笑む。会話とまるでかみ合っていない。

「それを探すのがあなたの役目でしょう」

だが、黒髪の女にはファクターXが何なのか、未だに理解できなかった。理解できないものをどうやって探せばいいのか。考えを巡らせながら黒い仔犬を見た。こいつと一緒にいたアンドロイドはタイガと仲がよかったっけ。そっちから攻めてみるのも面白いかもしれない。女として。

「わかった。それは何とかするわ。

でも、彼らは私たちが思っているほどやわじゃないわ。タイガに接してみてわかった。肉体を持つ彼らのエネルギーは私を遥かに凌駕していた。ただ、彼らはそのエネルギーの使い方を知らないだけ。一掃するにはかなりの時間と労力が必要よ。そこまでやる理由はなんなのか、そろそろ教えてくれてもいいんじゃない？マザー」

マザーと呼ばれた金髪の女は再び微笑んだ。聖母マリアを連想させるような、慈愛にあふれた微笑みだ。

「彼らがここの環境を破壊しているから？

彼らを駆逐しても、一億年もすれば、また同じような状況になるかもしれないわよ」

黒髪の女は言い終わると、ねっとりとした視線をマザーに向けた。

マザーはその視線から逃れるように、窓の外を眺めた。

「そんなんじゃないわ。私は世界が砂漠になっても構わないの。そんなことじゃないのよ」

「じゃあ、一体何なの。彼らを敵視する理由は」

マザーは暫く黙って海を見ていた。

海鳥が優雅に空を舞っている。小魚を狙っているのだろう。その小魚も、海鳥もまた脆く儂い生命だ。この星以外では存在すらままならない。

「あきちゃったのよ」

マザーがぼつりと言った。そして、再び零れんばかりの笑みを見せた。

黒髪の女の背筋をずっと冷たいものが走り抜けた。

そして、この感情こそが「恐怖」というものなのだと悟った。

終



この度は「ファクターX」をご覧頂き、誠にありがとうございました。

思い起こせば、この本の着想を得たのは何年も前になります。ある時、妻が夜中の帰宅時に車でゴム手袋を踏んだらしく、バックミラー越しに見た手袋がひどく怖いものに見えたそうです。その話から、喜多隆斗としてはどんな話を連想するのか、と尋ねられ、地面からはい出す禍々しい小人の手という発想を得ました。

その発想から練りに練り、横道に逸れに逸れ、七転八倒し、地面からの手はどこかへ行ってしまいましたが、なんとかこの物語に辿り着きました。なにはともあれ、発想の原点を与えてくれた妻に感謝です。

本書の中で「井之方」というキャラクターが登場します。「井之方」は僕が好きなキャラクターで「幸福市場」にも登場します。冴えない中年特有の外見で誰かに似ていると言われそうですが、特にモデルがいるわけではありません。念のため。

それからというもの、仕事の合間を見て少しずつ書き溜めてきました。ずいぶんと長い時間をかけてしまったので、文章のくせが変わってしまっているなか心配です。また、稚拙な文章も目立つかと思いますが、どうかご容赦いただき、長い目で見ただけならと思います。

本書を通じて、少しでも不思議な世界を堪能いただければ、作者として幸せな限りです。

2012年8月 喜多隆斗

ファクターX

<http://p.booklog.jp/book/54863>

著者：喜多隆斗

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kitaryuto775/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/54863>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/54863>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ